

活人形

泉鏡花

青空文庫

急病	系図	一寸手懸	宵にちらり	妖怪沙汰	乱れ髪	籠の匣
幻影	破廂	夫婦喧嘩	みるめ、かぐはな	無理	強迫	走馬燈
の痕	火に入る虫	啊呀！	同士討	虐殺	二重の壁	赤城様——得
三様	旭					

一 急病

雲の峰は崩れて遠山の麓に靄薄く、見ゆる限りの野も山も海も夕陽の茜に染みて、遠近の森の梢に並ぶ夥多寺院の藁は眩く輝きぬ。処は相州東鎌倉雪の下村……番地の家は、昔何某とかやいえりし大名邸の旧跡なるを、今は赤城得三が住家とせり。

門札を見て、「フム此家だな。と門前に佇みたるは、倉瀬泰助という当時屈指の探偵なり。色白く眼清しく、左の頬に三日月形の古創あり。こは去年の春有名な大捕物をせし折、鋭き小刀にて傷けられし名残なり。探偵の身にしては、賞牌ともいいつべき名譽の創痕なれど、衆に知らるる目標となりて、職務上不便を感ずること尠からざる由を啣てども、巧なる化粧にて塗抹すを常とせり。

倉瀬は鋭き眼にて、ずらりとこの家を見廻し、「ははあ、これは大分古い建物だ。まるで画に描いた相馬の古御所というやつだ。なるほど不思議がありそうだ。今に見ろ、一番正体を現してやるから。と何やら意味ありげに眩きけり。

さて泰助が東京よりこの鎌倉に來りたるは、左のごとき仔細のありてなり。

今朝東京なる本郷病院へ、呼吸も絶たえだえ々に駈かけ込みて、玄関に着くとそのまま、打倒れて絶息したる男あり。年は二十三にして、扮装みなりは好よからず、容かおかたち貌よういたく憔悴やつたり。検死の医師の診察せるに、こは全く病氣のために死したるにあらで、何にかあるらん劇はげしき毒に中あたりたるなりとありけるにぞ、棄置き難しと警官がとりあえず招寄せたる探偵はこの泰助なり。

泰助はまず卒倒者の身体を検して、袂たもとの中より一葉の写真を探り出だしぬ。手に取り見れば、年の頃はたち二十歳ばかりなる美麗うつくしき婦人おんなの半身像にて、その愛々くちもとしき口許は、写真ながら言葉を出ださんばかりなり。泰助は莞爾かんじとして打うち領うなずき、「犯罪の原因と探偵の秘密は婦人おんなだという格言がある、何、訳はありません。近い内にきつと罪人を出しましう。と事も無げに謂いう顔を警部は見遣みやりて、「君、鰻うなぎでも食くつて死しよつたのかも知れんが。何も毒殺されたという証拠は無いではないか。泰助は死骸しがいの顔を指さして、「御覧なさい。人品ひとがらが好よくつて、瘦やせつこけて、心配のありそうな、身分のある人が落魄おちぶれたらしい、こういう顔色かおつきの男には、得て奇妙な履歴があるものです。と謂いつつ、手にせる写真を打返して、頻しきりに視ながめていたりけり。先刻より死骸の胸に手を載せて、一心に容体を伺いいたる医師は、この時人々を見返かえりて、「どうやら幽かすかに脈が通う様です。こつちの者に

なるかも知れません。静しずかにしておかなければ不可いけませんから、貴下あなた方は他室あつちへお引取下さい。警部は巡查を引連れて、静しずかにこの室まを立去りぬ。

泰助は一人残りて、死人の呼吸いきを吹返さんとする間際には、秘密を唸うなり出す事もやあらんと待構うれば、医師の見込みは過あやまたず、ややありて死骸は少しずつの呼吸を始め、やがて幽まなこに眼を開き、糸よりもなお声細く、「ああ、これが現世このよの見納みおさめかなあ。得たりと医師は膝立直して、水薬を猪口ちよこに移し、「さあこれをお飲みなさい。と病人の口の端はたに持行けば、面おもてを背けて飲まんとせず。手をもて力無げに振払い、「汝うぬ、毒薬だな。と眼まなこを睜みはりぬ。これを聞きたる泰助は、（来たな）と腹に思うなるべし。

医師は声こゑを和やわらけて、「毒じやない、私は医師いしやです。早くお飲みなさい。という顔をまず屹きつと視みて、やがて四辺あたりを見廻しつ、泰助に眼めを注そそぎて、「あれは誰方どなた。泰助は近く寄りて、「探偵吏たんていしです。「ええ、と病人は力を得たる風情にて、「そうして御姓名おなまえは。「僕は倉瀬泰助。と名乗るを聞きて病人は嬉しげに倉瀬の手を握り、「貴下あなたが、貴下あなたがあの名高い……倉瀬様さん。ああ嬉しや、私は本望かなが協かった。貴下に逢えば死しんでも可いい。と握りたる手に力を籠めぬ。何やら仔細あるべしと、泰助は深切に、「それはどういう次第しだいだね。「はい、お聞き下さいまし、と言わんとするを医師は制して、「物ものを言ったり、配き慮あつ慮かいをしては、

身体からだのために好くない。と諭せども病人は頭こうべを掉ふりて、「悪僕——八蔵奴めに毒を飲まされましたから、私はどうしても助りません。「何、八蔵が毒を。……と詰寄る泰助の袂ひを曳ひきて、医師は不興ふきやうに、「これさ、物を言わしちや悪いというのに。「僕は探偵の職掌だ。問わなければならぬ。「私は医師の義務だから、止めなければなりません。と争あらがえば病人は、「御深切は難ありがと有とう存じますが、とても私は助りませんのですから、どうぞ思おもつてゐることを言わして下さいまし。明日まで生延なまのびびて言わずに死ぬよりは、今お話し申まをしてここで死ぬ方が勝手でございます。と思ひ詰めてはなかなか、動くべくも見えざりければ、探偵は医師に向いて、「是非はかが無い。ああいうのですから、病人の意にお任せなさい。病人はまた、「そうして他ほかの人ひとに聞きかしようございせんから、恐入おそ入いりますが先生はどうぞあちらへ。……とありければ、医師は本意ほんい無なげに室むろの外おもてに立出たでけり。

二 系図

病人は苦痛を忍しのびて語り出だしぬ。

我は小田原うまれの生なまにて本間次三郎という者。幼少の折父母を失いければ、鎌倉なる赤城家

に嫁ぎたる叔母の許もとにて養われぬ。仮の叔父なる赤城の主人あるじは大酒のために身を損いて、その後病死したりしかば、一族同姓の得三といえるが、家事万端の後見せり。

叔母には下枝しげえ、藤とて美しき二人の娘あり。我とは従兄いとこ妹同士にていずれも年紀としは我より少わし。多くの腰元に斉眉かしずかれて、荒き風にも当らぬ花なり。我は食客の身なれども、叔母の光を身に受けて何不自由無く暮せしに、叔母はさる頃病氣やまいに懸かり、一時に吐血してその夕敢ゆうあゑなく逝みりぬ。今より想えば得三が毒殺なせしものなるべし。さる悪人とはその頃には少しも思いがけざりき。

されば巨万の財産を挙げて娘の所有ものとなし、姉の下枝に我を娶めあわせ後日家を譲るよう、叔母はくれぐれ遺言せしが、我等の年紀としの少わかかりければ、得三は旧もとのまま一家いっけを支配して、己おのが随意まにぞ振舞いける。

叔母死して七七日の忌いも果てざるに、得三は忠実の仮面を脱ぎて、ようやく虎狼こうろうの本性を顕あらわしたり。入用いらぎの雑用ぞうようを省くと唱え、八蔵といえる悪僕一人を留め置きて、その余の奴僕ぬぼくは尽く暇を取らせ、素性も知れざる一人の老婆を、飯炊めしたきとして雇い入れつ。こは後より追々にし出ださんずる悪計わるだくみの、人に知られんことを恐れしなりけり。昨日きのうの栄華に引替えて娘は明暮不幸を啣かち、我も手酷てひどく追使おいつかわるる、労苦を忍びて末々たのしを樂み、た

またま下枝と媾あいびき曳ひしてわずかに慰め合いつ、果は二人の中をもせきて、顔を見るさえ許さざれば垂籠たれこめたる室まの内に、下枝の泣く声聞く毎たびに我はは腸はらわたを断つばかりなりし。

数うれば三年前ぜん、一日黄昏あるひたそがれの暗紛ひそれ、潜ひそかに下枝に密しのび会あい、様子を聞けば得三は、四十を越したる年にも恥じず、下枝を捉とらえて妻にせん。我心に従えと強迫すれど、聞入れざるを憤り、日に日に手暴てあらき折檻せつかんに、無慙むざんや身内の皮は裂け、血に染そみて、紫色に腫れたる痕あとも多かりけり。

下枝は我に取とり継つがりて、得堪ええぬ苦痛を訴えつつ、助けてよ、と歎くになむ。さらば財産も何かせむ。家邸も何かせむ、皆得三に投与えて、かかる悪魔の火宅のがを遁のがれ、片田舎にて気散じに住みたまう気は無きか、連れて遁にげんと勧めしかど、否いや、先祖より伝わりたる財産は、国とも城ともいうべきもの、いかに君と添いたいとて、人手には渡されず。今得三は国の仇あだ、城を二十重はたえに囲まれたれば、責殺されんそれまでも、家は出でずに守るといふ。男勝りの心に恥じて、強いてとも言い難く、さればとてこのままにては得三の手に死ぬばかりぞ、と抱いだき合いつつ泣きいたりしを、得三に認められぬ。言語道断の淫戯いたずらもの者片へん時も家に置難しと追出されんとしたりし時、下枝が記念かたみに見たまえとて、我に与えし写真あり。我はかの悪僕に追立てられて詮せん方かた無く、その夜赤城の家を出で、指して行方もある

らざればその日その日の風次第、寄る辺定めぬ捨小舟、津や浦に彷徨うて、身に知る業の無かりしかば、三年越しの流浪にて、乞食の境遇にも、忘れ難きは赤城の娘、姉妹ともさぞ得三に、憂い愁い目を見るならむ。助くる術は無きことか、と頼母しき人々に、一つ談話にするなれど、聞くもの誰も信とせず。思い詰めて警察へ訴え出でし事もあれど、狂気の沙汰とて取上げられず。力無く生甲斐無く、漣や滋賀県に佗年月を過すうち、聞く東京に倉瀬とて、弱きを助くる探偵ありと、雲間に高きお姓名の、雁の便に聞ゆるにぞ、さらば助を乞い申して、下枝等を救わむと、行李そこそこかの地を旅立ち、一昨日この地に着きましたが、暑氣に中りて昨日一日、旅店に病みて枕もあがらず。今朝はちと快氣なるに、警察を尋ねて見ばやと、宿を出づれば後より一人跟け来る男あり。忘れもせぬ其奴こそ、得三に使わるる八蔵という悪僕なれば、害心もあらんかと、用心に用心して、この病院の裏手まで来りしに、思えば運の尽なりけん。にわかには劇しく腹の痛みて、立つてもいられず大地に僵れ、苦しんでいる処へ誰やらん水を持来りて、吞ましてくる者のあり。眼も眩み夢中にてただ一呼吸に吞干しつ、やや人心地になりたれば、介抱せし人を見るに、別人ならぬ悪僕なり。はつと思うに毒や利きけむ、心身たちまち悩乱して、腸絞る苦しさにさては毒をば飲まされたり。かの探偵に逢うまでは、束の間欲しき玉

の緒を、繋ぎ止めたや繋ぎ止めたやと絶入る心を激まして、幸いここが病院なれば、一心に駈け込みし。その後は存ぜずと、呼吸つきあえず物語りぬ。

三 一寸手懸

泰助は目をしばたたき、「薄命な御方だ、御心配なさるな。請合つてきつと助けてあげます。と真実面に顕るれば、病人は張詰めたる気も弛みて、がっくりと弱り行きしが、頻に袂を指さすにぞ、泰助は耳に口、「何です、え、何ぞあるのですか。」「下枝の写真。」「むむ、それはこれでしよう。先刻僕が取出しました。とかの写真を病人の眼前に翳せば、つくづくと打視め、「私と同じ様に、さぞ今では憔悴、とほろりと涙を泣べつつ、」「この面影はありますまいよ。死顔でも見たい、もう一度逢いたい。と現心にいいければ、察し遣りて泰助が、彼の心を激まさんと、「氣を丈夫に持つて養生して、ね、翌朝まで眼を塞がずに僕が下枝を連れて来るのを御覧なさい。今夜中に助け出して、財産も他手には渡さないから、必ず御案じなさるな。と言語を尽して慰むれば、頷くように眼を閉じぬ。

折おもてから外より戸を叩きて、「もう開けましても差支えございませんか。と医師の尋ぬるに泰助は振返りて、「宜よろしい、おはいんなさい。と答うれば、戸を排ひらきて、医師とともに、見も知らぬ男入り来れり。この男は、扮装みなり、風俗、田舎漢いなかものと見えたるが、日向眩ひなたまばゆき眼め色つきにて、上眼づかいにきよろつく様、不良よからぬ輩やからと思われたり。

泰助屹きつと眼を着けて、「お前様さんは何しに來たのだ。問われて醜むくつけ顔けき巖丈男の声ばかり惡優しく。「へいへい、お邪魔様申します。ちとお見舞みめえに罷出つんでたんで。「知己ちかづきのお方かね。「いえ、ただ通懸とおりかかった者でがんすがその方が強えちくお塩梅あんばいの悪い様子、お案じ申して、へい、故意わざと。という声耳に入りたりけん。その男を見て、病人は何か言いたげに唇を震わせしが、あわれ口も利けざりければ、指もて其方そなたを指示さししめし、怒り狂う風情にて、重き枕もたを擡もたげしが、どうと倒れて絶入りけり。

今病人に指さされし時、件くだんの男は蒼あおくなりて恐しげに戰慄わななきたり。泰助などて見遁みのがすべき。肚はらの中に。ト思案して、「早く、お退のきなさい。お前方の入って来る處ではありません。と極きめつけられて悄氣しよげかえり、「ああ呼吸いきを引取ましたかい。可愛や可愛や、袖振合まかんうも他生の縁とやら、お念仏申しましよ。と殊勝らしく眼を擦り赤めてやおら病院を退まかん出でぬ。泰助は医師に向い、「下手人がしらばくれて、（死）をたしかめに來たものらし

い。わざと化されて、怪まぬように見せて反対に化かしてやった。油断をするに相違無い。「いかさま怪しからん人体でした。あのまま見遁して置くお所存ですか、「なあにこれから彼奴を突止めるのです。この病人は及ばぬまでも手当を厚くして下さい。誠に可哀相な者ですから。」「何か面白い談話がありましたらう。」「ちつとも愉快くはありませんでした、がこれから面白くなるだろうと思うのです。追々お談話申しませう。と帽子を取って目深に被り、戸外へ出づればかの男は、何方へ行きけん影も無し。脱心たりと心急立ち、本郷の通へ駈出でて、東西を見渡せば、一町ばかり前に立ちて、日蔭を明神坂の方へ、急ぎ足に歩み行く後姿はその者なれば、遠く離れて見失わじと、裏長屋の近道を潜りて、間近く彼奴の後に出でつ。まずこれで可しと汗を容れて心静かに後を跟けて、神田小柳町のとある旅店へ、入りたるを突止めたり。

泰助も続いて入込み、突然帳場に坐りたる主人に向いて、「今の御客は。と問えば、訝かしげに泰助の顔を凝視しが、頬の三日月を見て慇懃に会釈して、二階を教え、低声にて、「三番室。」

四番室の内に忍びて、泰助は壁に耳、隣室の談話声を聞けば、おのが跟けて来し男の外になお一人の声しけり。

「お前、御苦労であつた。これで家へ帰つても枕を高うして寐られるというものだ。」「旦那もう帰国ますか。この二人は主従と見えたり。」「ああしてしまえば東京に用事は無いのだ。今日の終汽車で帰国としようよ。」「それが宜うございましょう。そうして御約束の御褒美は。」「家へ行つてから与る。」「間違ませんか。」「大丈夫だ。」「きつとでしようね。」「ええ、執拗な。」「難有え、と無法に大きな声をするにぞ、主人は叱りて、「馬鹿め、人が聞かあ。後は何を囁くか小声にてちつとも聞えず。少時して一人その室を立出で、泰助の潜みたる、四番室の前を通り行くを、戸の隙間より覗き見るに、厳格き紳士にて、年の頃は四十八九、五十にもならんずらん。色浅黒く、武者髯濃く、いかさま悪事は仕かねまじき人物にて、扮装は絹布ぐるみ、時計の金鎖胸にきらきら、赤城というはこの者ならんと泰助は帳場に行きて、宿帳を検すれば、明かに赤城得三とありけり。（度胸の据つた悪党だ、）と泰助は心に思いつ。

四 宵にちらり

三時少し過ぎなれば、終汽車にはまだ時間あり。一度病院へ取つて返して、病人本間

の様子を見舞い、身支度して出直さんと本郷に帰りけるに、早警官等は引取りつ。泰助は医師に逢いて、予後の療治を頼み聞え、病室に行きて見るに、この不幸なる病人は氣息奄奄ええん々として死したるごとく、泰助の来れるをも知らざりけるが、時々、「赤城家の秘密……怨めしき得三……恋しき下枝、懐かしき妻、……ああ見たい、逢いたい、」と同じ言を幾たびも讕言うわごとに謂うを聞きて、よくよく思い詰めたる物と見ゆ。遙々我を頼みて来し、その心さえ浅からぬに、蝦夷えぞ、松前はともかくも、箱根以東にその様な怪物ばけものを棲せ置きては、我が職務の恥辱なり。いで夏の日の眠気覺しに、泰助が片膚脱かたはだぎて、悪人ばら儕の毒手の裡うちより、下枝姉妹きようだいを救うて取らせむ。証拠を探り得ての上ならでは、渠等かれらを捕縛は成り難し。まず鎌倉に立越えてと、やがて時刻になりしかば、終汽車に乗り込みて、日影ようよう傾く頃、相州鎌倉に到着なし、滑川なめりがわの辺なる八橋楼に投宿して、他所よそながら赤城の様子を聞くに、「妖物屋敷ばけもの、」「不思議の家、」「あるいは「幽霊の棲家すみか、」などと怪しからぬ名を附して、誰ありて知らざる者無し。

病人が雪の下なる家を出でしは、三年前の事とぞ聞く。あるいは救助すくいの遅くして、下枝等は得三のために既に殺されしにあらざるか、遠くもあらぬ東京に住む身にて、かくまでの大事を知らず、今まで棄置きたる不念ぶねんさよ。もし下枝等の死したらんには、悔いても及

ばぬ一世の不覺、我三日月の名折なり。少しも早く探索せむずと雪の下に赴きて、赤城家の門前に佇みつつ云々と呟きたるが、第一回の始まりなり。

この時赤城得三も泰助と同じ終汽車にて、下男を従えて家に帰りつ。表二階にて下男を相手に、晩酌を傾けおりしが、得三何心無く外を眺め、門前に佇む泰助を、遠目に見附けて太く驚き、「あッ、飛んだ奴が舞込んだ。と微酔も醒めて蒼くなれば、下男は何事やらんと外を望み、泰助を見ると斉しく反り返りて、「旦那々々、あれは先刻病院に居た男だ。と聞いてますます蒼くなり、「ええ！ それでは何だな。お前を疑う様な挙動があつたというのは彼奴か。「へい、左様でござい。恐怖眼をして我をじろりと見た。「こりや飛んだ事になつて来た。と一方ならず恐るる様子、「何もそう、顔色を変えて恐怖がある事もありますめえ。病気で苦しんでる処を介抱してやったといえばそれ迄のことだ。「でもお前が病院へ行った時には、あの本間の青二才が、まだ呼吸があつたというではないか。「ひくひく動いていましたツけ。「だから、二才の口から当家の秘密を、いいつけたに違いない。「だつて何程のこともあるめえ。と落着く八蔵。得三は頭を振り、いや、他の奴と違う。ありやお前、倉瀬泰助というて有名な探偵だ。見ろ、あの頬の創の痕を。な、三日月形だろう、この界限でちつとでも後暗いことのある者は、あれを知

らぬは無いくらいだ。といえは八蔵はしたり顔にて、「我れも、あの創を目標にして這ツ面を覚えておりますのだ。「むむ、汝はな、これから直ぐに彼奴の後を跟けて何をするか眼を着けろ。「飲込ました。「実に容易ならぬ檻樓が出た。少しでも脱心が最後、諸共笠の台が危ないぞ。と警戒れば、八蔵は傲慢なる顔色にて、「たかが生ツ白い瘦せた野郎、鬼神ではあるめえ。一思いに捻り潰してくりよう。と力瘤を叩けば、得三は夥度頭を振り、「うんや、汝には對手が過ぎるわ。敏捷い事ア狐の様で、どうして喰える代物じゃねえ。しかし隙があつたら殺害ツちまえ。」

まことや泰助が一期の失策、平常のごとく化粧して頬の三日月は塗抹居たれど、極暑の時節なりければ、絵具汗のために流れ落ちて、創の露れしに心着かず、大事の前に運悪くも悪人の眼に止まりたるなり。

さりととも知らず泰助は、ほぼこの家の要害を認めたれば、日の暮れて後忍び入りて内の様子を探らんものをと、踵を返して立去りけり。

表二階よりこれを見て、八蔵は手早く身支度整え、「どれ後を跟けましょう。「くれぐれも脱心なよ。「合点だ。と鉄の棒の長さ一尺ばかりにて握太きを小脇に隠し、勝手口より立出しが、この家は用心嚴重にて、つい近所への出入にも、鎖を下す掟とかや。

心急きたる折ながら、八蔵は腰なる鍵を取り出して、勝手の戸に外より鎖を下し、急ぎ門前に立出でて、滑川の方へ行く泰助の後より、跫音ひそかに跟け行けども、日は傾きて影も射映ねば、少しも心着かざりけり。

五 妖怪沙汰

泰助は旅店に歸りて、晚餐の前に湯に行きつ。湯殿に懸けたる姿見に、ふと我顔の映るを見れば、頬の三日月露れいたるにぞ、心潜かに驚かれぬ。ざっと流して座敷に歸り、手早く旅行鞆を開きて、小瓶の中より絵具を取り出し、好く顔に彩りて、懷中鏡に映し見れば、我ながらその巧妙なるに感ずるばかり旨々と一皮被りたり。

今夜を過ぎず赤城家に入込みて、大秘密を洩さくれん。まずその様子を聞置かんと、手を叩きて亭主を呼べば、気軽そうな天保男、とつかわ前に出来りぬ。「御主人外でも無いが、あの雪の下赤城という家。と皆まで言わぬに早合点、「へい、なるほど妖物邸。その妖物屋敷というのはどういう理窟だい。「さればお聞きなさいまし。まず御免被つて、と座を進み、「種々不思議がありますので、第一ああいう大な家に、棲んで

いる者がございません。「空屋かね、「いえ、そこんところが不思議でござて。ちゃんと
 門札も出ておりますが何者が住んでいるのか、それが解りません。「ふふむ、余り人が出
 はいり
 入をしないのか。「時々、あの辺で今まで見た事の無い婆様に逢うものがございます
 が、何でも安達あたちが原の一ツ家の婆々ばばという、それはそれは凄惨にんていな人体だそうで、これは多
 分山猫の妖精ばけものだろうという風説うわさでな。「それじゃあ風の吹く晩には、糸を繰る音が聞え
 るだろうか。「そこまでは存じませんが、折節女の、ひい、ひい、と悲鳴を上げる声が聞
 えたり、男がげらげらと笑う声があったり、や、も、散々な妖原ばけはらだといえますで。とこれ
 を聞きて泰助は乗出して、「ほんとなら奇怪な話だ。まずお茶でも一ツ……という一眼小
 僧は出ないかね。とさも聞惚ききとれたる風を装おい、愉快おもしろげに問いかければ、こは怪談の御
 意に叶いしことと亭主は頻しきりに乗地のりじとなり、「いえ世がこの通り開けましたで、そういう甘
 口な妖方ばけかたはいたしません。東京の何とやら館の壮士が、大勢でこの前の寺さきへ避暑に來て
 でございますが、その風説うわさを聞いて、一番妖物退治をしてやろうというので、小雨の降る
 夜二人連で出掛けました。草ぼうぼうと茂った庭へ入り込んで、がさがさ騒いだと思し召
 せ。ずどんずどんどこかで短銃ピストルの音がしたので、真蒼まつさおになつて遁にげて帰ると、朋輩
 のお方が。そりや大方天狗てんぐくさみが噓をしたのか、そうでなければ三ツ目入道が屍ひを放つた音だ

ろう。誰^{だれ}某^{それ}は屁^へ玉^{たま}を喰^{くら}つて凹^{へこ}んだと大きに笑われたそうで、もう懲^{こり}々^{こり}して、誰も手出しは致しません、何と、短銃では、岩見重太郎宮本の武蔵でも叶いますまい。と渋茶を一杯。舌を濡^ぬして言^{こと}を継^つぎ、「串^{じょうだん}戯^ははさて置き、まだまだ気味の悪いのは。と声を低くし、「幽^れ霊^こが出来ますので。こは聞^き処^{きどころ}と泰助は、「人、まさか幽霊が。とわざといえは亭主は至極真面目になり、「いいえ、人から聞いたものではございません。私^{わたくし}がたしかに見ました。「はてな。「思い出すと戦慄^{ぞつ}といたします。と薄気味悪^{うしろ}げに後を見返り、「部室^{へや}の外が直ぐ森なので、風通しは宜^ようございますが、こんな時には、ちとどうも、と座敷の四隅に目を配りぬ。

泰助は思い当る事あれば、なおも聞かんと亭主に向い、「談^{はな}してお聞かせなさい、実に怪談が好物だ。「余り陰気な談をしますと是非魔^まが魅^さすといえますから。と逡巡^{しりぞ}みすれば、「馬鹿なことを、と笑われて、「それでは燈^ひを点^{とも}して懸^かりましょう。暗くなりまして。

「怪談は暗がりに限るよ。「ええ！ 仕方がありません。先月の半ば頃^{あるひ}一日晩方の事……」この時座敷寂^{しん}として由井が浜風陰々たり。障子の棧^しも見えずなり、天井は墨のごとく四隅は暗く物^{もの}凄^{すこ}く、人の顔のみようよう仄^ほめき、逢魔^{あうま}が時とぞなりにける。亭主はいよいよ心臆^{おく}し、団扇^{うちわ}にてはたはたと、腰の辺^{あたり}を煽^{あお}ぎ立て、景気を附けて語りけるは、「ちよう

どこの時分用事あつて、雪の下を通りかかり、かねて評判が高いので、怯気々々もので歩いて行くと、甲走かんぱしった婦人おんなの悲鳴が、青照山の笥こたまに響いて……きい——きいつ。「ああ、嫌いや否やな声だ。「は——我ながら何ともいえぬ異変な声でございます。と泰助と顔を見合せ、亭主は膝下ひざもとまでひたと摺すり寄り、「ええそれが私は襟許わたくしから、氷を浴びたような気が致して、釘附くぎづにされたように立止つて見ました。有様ありようは腰ががくついて歩行あるけませなんだの。すると貴客あなた、赤城の高楼たかどのの北の方の小さな窓から、ぬうと出たのは婦人おんなの顔、色真ま蒼つさおで頬ほ面づは消えて無いというほど瘡やせつこけて、髪の毛がこれからこれへ（ト仕方をして）こういう風、ぱっちり開あいた眼が、ぴかりしたかと思うと、魂消たまぎつた声で、助けて——助けて——と叫びました。」

語るを聞いて泰助は心の中うちに思うよう、いかさま得三に苛責かしゃくされて、下枝かあるいは妹か、さることもあらむかし。活命なぐらえてだにあるならば、おツつけ救い得させむずと、漫そぞろに憐あわれを催しぬ。談話途切はなしれて宿の亭主は、一服吸わんと暗くらがり中を、手探りに、煙管きせるを捜して、「おや、変だ。ここに置いた煙管が見えぬ。あれ、魔隠、気味の悪い。となおそここを見廻せしが、何者を見たりけむ。わつと叫ぶに泰助も驚おどろきて、見遣る座敷の入口に、煙けぶりのごとき物体ものあつて、朦朧もうろうとして漂えり。あれはと認ひまむる隙ひまも無く、電いなずま? ふつと暗や

中に消え、やがて泰助の面前に白き女の顔あらわ顯れ、拭ぬぐいたらむ様にまた消えて、障子にさばく乱髪らんぱつのさらさらという音あり。

六 乱れ髪

亭主の叫あわびし声を怪しみ、慌あわしく来る旅店の内儀、「まあ何事でござんすの、と洋燈ランブを点つつけて据え置きながら、床の間の方を見るや否や、「ン、と反そり返るを抱き止めて、泰助きつ屹と振返れば、柱隠しの姿絵という風情にて、床柱に凭もたれて立つ、あら怪しき婦人おんなありけり。

つくづくその婦人を見るに、年は二十三なるべし。しおしおとある白地の浴衣の、処々裂け破れて肩や腰あたりの辺には、見るもいぶせき血の汚点にじみたるを、乱次しどけな無く打纏うちまとい、衣紋えもん開ひもきて帯も占めず、紅くれなのくけ紐を胸高に結びなし、脛はぎも顯あらわに取乱はだえせり。露垂るばかりの黒髪は、ふさふさと肩に溢こぼれて、柳の腰に纏はだえいたり。膚の色真白く、透通るほど清らかに、顔は太いたく蒼くらみて見ゆ。ただ屹きつとしたる品格ありて眼の光凄すさまじく、頬の肉落おとち顯が細りて薄衣の上より肩の骨の、いたいたしげに顯あらわれたるは世に在る人とは思われず。強き光

に打たれなば、消えもやせんと見えけるが、今泰助等を見たりし時、物をも言わで莞爾と白歯を見せて笑める様は、身の毛も弥立つばかりなり。

人々ものを言いかくれど、答は無く、ただにことにこと笑うを見て、始め泰助は近隣の狂女ならんと見て取りつ、問えばさるものは無しという。今もなお懷中せる今朝の写真に心附けば、慄れ果ててその面影は無けれども、氣ばかり肖たる処あり。さては下枝のいかにしてか脱け出でて来しものにはあらずや。日夜折檻をせらるると聞けば、責苦にや疲れけん、呼吸も苦しげに見ゆるぞかし。こはこのままに去し難しと、泰助は亭主に打向い、「どこか閑静な処へ寢さして、まあまあ氣を落着かしてやるが可い。当家へ入つて来たのも、何かの縁であろうからと、勸むれば、亭主は氣の好き男にて、一議も無く承引なし、「向側の行当の部屋は、窓の外がすぐ墓原なので、お客がございませんから、幽霊でさえなけりや、それへ連れて行つて介抱してつかわしましょう。といいつつ女房を見返りて、「おい、御女中をお連れ申して進ぜなさいと、命つけられて内儀は恐々手を曳いて導けば、怪しき婦人は逆らわず、素直に夫婦に従いて、さもその情を謝するがごとく秋波斜めに泰助を見返り見返り、蹣跚として出行きぬ。

面につたり蜘蛛の巣を撫払いて、縁の下より這出づるは、九太夫にはちと男が好過

ぎる赤城の下男八蔵なり。かれ先刻さきに泰助の後を跟け来りて、この座敷の縁の下に潜みており、散々やぶか藪蚊に責められながら、疼痛いたみを堪こらうる天晴豪傑あつぱれ、かくてあるうち黄昏たそがれて、森の中暗うなりつる頃、白衣を着けたる一人の婦人、樹の下蔭あしわに顕れ出でつ、やおら歩あゆみを運ばして、雨戸は繰らぬ縁側へ、忍びやかに上りけるを、八蔵臆おぼろげ氣に見てもしやそれ、はてよく肖た婦人おんなもあるものだ、下枝は一室ひとまに閉込めあれば、出て来らるべき道理は無きが、となおも様子を聞きいるに、頭の上なる座敷には、人の立騒けはいぐ氣勢あり。幽霊などと動揺どうよめきしがようやくに静まりて、彼方あなたへ連れ行き介抱せんと、誘いざない行きしを聞澄まし、縁の下よりぬつと出で蚊を払いつつ渋面つくり、下枝ならむには一大事、とくと見届けてせむ様あり、と裏手の方の墓原ひそかへ潜に忍び行きたりける。

座敷には泰助が、怪しき婦人を見送りて、下枝の写真を取出し、洋燈ラングに照して彼とこれと見競べている処へ、亭主は再び入来りて、「お客様、寢床を敷いてやりますと、僵たおれる様に臥ふせりました。何だか不便ふびんな婦人おんなでございます。それは深切に好くしておやんなすつた。そうして何とか言いましたかい。「あれは唾おとしじやないかと思われます。何を言つても聞えぬようすごございます。」「何しろ談話はなしの種になりそうだね。」「いかさまな。」「で、私はこれからちよいと行つて来る処がある。御当おうち家へ迷惑は懸かけないから、帰るまでああして

蔵匿かくまつて置いて下さらないか、衣服きものに血が附ついたり、おどおどしている処を見ると、邪じやけ
 慳んしゅうとめな姑にいびられる嫁か。「なるほど。「あるいは継母に苦しめられる娘か。「勾引かどわか
 された女で、女郎にでもなれと責められるのか。こりや、もしよくあるやつでございま
 せ。「うむその辺だろう。何でも曰いわくつき附に違いないから、御亭主、一番俠客おとこぎ氣を出しな
 さい。「はあて、ようござえさあ、ほい、直ぐとその氣になる。ははははは。かから
 には後に懸念無し。亭主もし二の足ふまば我が職掌をいうべきなれど、蔵匿うことを承知
 したればそれにも及ばず都合可よし。人情なればこの婦人を勦いたわりてやる筈はずなれど、大犯罪人
 前にあり、これ忽ゆるがせにすべからずと、泰助は急ぎ身支度して、雪の下へと出行きぬ。赤城の
 下男八蔵は、墓原に来て突つきあたり當の部屋の前に、呼吸いきを殺していたりしが、他の者は皆立
 去りて、怪しと思う婦人おんなのみ居残りたる様子なれば、倒れたる墓石を押し寄せて、その上
 に乗りて伸び上り、窓の戸を細う開きて差覗さしのぞけば、かの婦人は此方こなたを向きて横様に枕し
 たれば、顔も姿もよく見えたり。「やあ！と驚きの余り八蔵は、思わず声を立てけるに
 ぞ、婦人は少し枕を上げて、窓をおおぎ見たる時、八蔵ぬつと顔差出つちし、拳こぶしに婦人を掴つかむ
 真似して、「汝、これだぞ、と睨ねめつくれば、連理引きに引かれたらむように、婦人は跳
 ね起きて打戦うちおのき、諸袖もろそでに顔を隠し、俯伏うつぶしになりて、「あれえ。」

七 籠の匣

倉瀬泰助は旅店を出でて、雪の下への道すがら、一叢樹立の茂りたる林の中へ行懸りぬ。月いと清うさしいでて、葉裏を透して照らすにぞ、偶然思い付く頬の三日月、また露れはせざるかと、懷中鏡を取出せば、きらりと輝く照魔鏡に怪しき人影映りけるにぞ、はつと鏡を取落せり。

とたんに鉄棒空に躍つて頭を目懸けて曳！と下す。さしつたりと身を交せば、狙い外れて発奮を打ち路傍の岩を真二つ。石鉄戛然火花を散らしぬ。こはかの悪僕八蔵が、泰助に尾し来りて、十分油断したるを計り、狙撃したりしなり。僥倖に鏡を見る時、後に近接曲者映りて、さてはと用心したればこそ身を全うし得たるなれ。

「しまった。と叫びて八蔵が、鉄棒を押取直すを、泰助ははつたと睨め付け、「御用だ。と大喝一声、怯む処を付け入つて、拳の雷手鍊のあてに、八蔵は急所を撲たれ、蹈反りて、大地はどうと響きけり。

「月夜に暗殺、馬鹿々々しい、と打笑いつつ泰助は曲者の顔を視めて、「おや、此奴は病

院へ来た奴だ。赤城の手下に違いないが、ふむ敵はもう我が来たことを知ってるな。こりや油断がならぬわい。危険々々々、ほんの一機でこの石の通りになる処、馬鹿力の強い奴だ。と舌を巻きしが、「待て、何ぞ手懸りになる様な、掘出し物があるうかも知れぬ。とかかる折にも油断無く八蔵の身体を検して腰に附けたる鍵を奪いぬ。時に取りては千金にも勝りたる獲物ぞかし。これあらば赤城家へ入込むに便あり造化至造妙と莞爾と領き、袂に納めて後をも見ず比企が谷の森を過ぎ、大町通つて小町を越し、坐禅川を打渡つて——急ぎ候ほどに、雪の下にぞ着きにける。

(談話前にもどる。)

ここに赤城得三は探偵の様子を窺えとて八蔵を出し遣りたる後、穩かならぬ顔色にて急がわしく座を立ちて、二室三室通り抜けて一室の内へ入り行きぬ。こは六畳ばかりの座敷にて一方に日蔽の幕を垂れたり。三方に壁を塗りて、六尺の開戸あり。床の間は一間の板敷なるが懸軸も無く花瓶も無し。ただ床の中央に他に類無き置物ありけり。鎌倉時代の上臈にや、小挂しやんと着こなして、練衣の被を深く被りたる、人の大きなの立姿。溢るる黒髪小袖の棲、色も香もある人形なり。言わぬ高峰の花なれば、手折るべくもあらざれど、被の雲を押分けて月の面影洩出でなば、臈長けたらんといと床し。

得三は人形の前に衝と進みて、どれ、ちよつと。上臈の被を引き上げて、手燭を翳して打見遣り、「むむ可々。と独言。旧のごとく被を下して、「後刻に高田が来る筈だから、この方はあれにくれてやつて、金にするとしてまず可しと。ところで下枝の方は、我れが女房にして、公債や鉄道株、ありたけの財産を、我れが名に書き替えてト大分旨い仕事だな。しかし、下枝めがまた悪く強情で始末におえねえ。手を替え、品を替え、撫つかりつして口説いても応と言わないが、東京へ行懸けに、梁に釣して死ぬ様な目に逢わせて置いたから、ちつとは応えたらう。それに本間の死んだことも聞かしてやつたら、十に九つはこつちの物だ。どうやら探偵が嗅ぎ附けたらしい。何もかも今夜中に仕上げざるめえ。その代り翌日ツから御大尽だ。どれ、ちよびと隠妾の顔を見て慰もうか。とかねてより下枝を幽閉せる、座敷牢へ赴くとて、廻廊に廻り出でて、欄干に凭りかかれば、ここはこれ赤城家第一の高樓にて、屈曲縦横の往来を由井が浜まで見通しの、鎌倉半面は眼下にあり。

山の端に月の出汐見るともなく、比企が谷の森の方を眺むれば、目も遙かなる畦道に、朦朧として婦人あり。黒髪颯と夜風に乱して白き衣服を着けたるが、月明りにて画けるごとく、南をさして歩むがごとし。

得三は啊呀あなやと驚き、「あれはたしかに下枝の姿だ……いや、いや、三年このかた以来、あの堅固な牢の内へぶちこんであるものを、まさか魔術を使いはしめえし、戸外おもてへ脱けて出る道理が無い。こりや心の迷いだ。脱にがしてはならぬ脱がしてはならぬと思つてゐるからだ。こればかりの事に神経を悩すとは、ええ、意気地の無い事だ。いかさまな、五十の坂へ踏懸けちやあ、ちと縊よりが戻ろうかい。だが油断はならない、早く行つて見て安心しよう。何、居るに違いないが……ままよ念のためだと、急がわしく、馳はせ行きて北の台と名づけたる高樓の、怪しげなる戸口に到り、合鍵にて戸を開けば、雷らいのごとき音ありて、鉄張の戸は左右あに開きぬ。室内に籠りたる生暖なまぬるき風むんむと面おもてを撲うちて不こころわる快きこといわん方無し。

手燭に照して見廻みまわせば、地に歸しけん天に朝しけん、よもやよもやと思いたる下枝は消えてあらざりけり。得三は顛倒てんとうして血眼ちまなこになりぬ。

八 幻影

先刻さきに赤城得三が、人形室を出行いでゆきたる少時しばらく後に、不思議なることこそ起りたれ。風

も無きに人形の被^{かづき}揺めき落ちて、妖^{あで}麗^{やか}なる顔の洩^もれ出でぬ。瑠璃^{るり}のごとき眼も動くようなりしが、怪しいかな影法師のごとき美人静々と室^まの中に歩^うみ出でたり。この幻^{まぼろ}影^{したと}譬^{たと}えば月夜に水を這^はう煙^{けぶり}に似て、手にも取られぬ風情なりき。

折から畳障りの荒らかなる、聲^{あしおと}音^{かなた}彼方^{かなた}に起りぬれば、黒き髪と白き顔はふつと消え失^うせ、人形はまた旧^{もと}の通り被^{かぶ}を被りぬ。

途端にがたひしと戸を開けて、得三は血眼に、この室に駈^かけ込み、「この方はどうだろう。あの様子では同じく翼^{はね}が生えて飛出したかも知れぬ。さあ事だ、事だ、飛んだ事だ。もう一度見ねばならない。と小洋燈^{こようし}の心を繰上げて、荒々しく人形の被をめぐり、とくと覗^{のぞ}きて旧のように被を下ろし、「うむ、この方は何も別条は無い。やれこれで少しは安^{おちつ}堵^いた。それにしても下枝めはどうして失^うせた知らん。婆々が裏切をしたのではあるまいか。むむ、何^{なん}しろ一番^{ただし}糺^{ただし}明^みて見ようと、掌^{たなそこ}を高く打鳴らせば、ややありて得三の面前に平伏したるは、当家に飼殺しの飯炊にて、お録といえる老婆なり。

得三は声鋭く、「お録、下枝をどこへ遁^{にが}した。と睨^{ねめつ}附^つくれば、老婆は驚きたる顔を上げ、「へい、下枝様^{さん}がどうかありませんか、「しらばくれない。きつと汝^{きさま}が遁^{にが}したんだ。」「いいえ、一向に存じません。」「汝^{うぬ}、言ッちまえ。」「ちつとも存じません。」「ようし、白

状しなけりやこうするぞ。と懷中より装弾したる短銃を取出し、「打殺すが可いか。
 とお録の心前に突附くれば、足下に踞りて、「何でそんな事をいたしましたしやう。旦那様
 が東京へいらつしやつてお留守の間も私はちゃんと下枝様の番をしておりました。縄は解
 いてやりましたけれども。「それ見ろ。そういう糞慈悲を垂れやあがる。我が帰るまで応
 といわなけりや、決して下してやることはならないと、あれほど言置いて行つたじやない
 か。「でもひいひい泣きまして耳の遠い私でも寝られませんか、それに主公、二日もあ
 して梁に鈎上げて置いちやあ死んでしまふじやございせんか。「ええ！ そんなことは
 どうでも可い。どこへ遁したか、それを言えッてんだ。「つい今の前も北の台へ見廻りに
 参りましたら、下枝様は平常の通り、牢の内に僵れていましたのに、にわかに居なくな
 ったとおつしやるが、実とは思われません。と言解様の我を欺くとも思われねば、得三は
 疑い惑い、さあらんには今しがた畦道を走りし婦人こそ、籠を脱けたる小鳥ならめ、下
 枝一たび世に出なば悪事の露頭は瞬く間と、おのが罪に責められて、得三の気味の悪さ。
 惨たらしゆう殺したる、蛇の鎌首ばかり、飛失せたらむ心地しつ立つても居ても落着かね
 ば、いざうれ後を追懸けて、草を分けて探し出し、引摺つて帰らんとお録に後を頼み置き、
 勝手口より出でんとして、押せども、引けども戸は開かず。「八蔵の馬鹿！ 外から鎖を

下して行く奴があるもんか。とむかばらたちの八ツ当り。

折から玄關の戸を叩きて、「頼む、頼む。と音訪う者あり。聞覚えのある声はそれ、とお録内より戸を開けば、外よりずっと入るは下男を連れたる紳士なりけり。こは高田駄平とて、横浜に住める高利貸にて、得三とは同気相集る別懇の間柄なれば、非義非道をもつて有名く、人の活血を火吸器と渾名のある男なり。召連れたる下男は銀平という、高田が氣に入りの人非人。いずれも法衣を絡いたる狼ぞかし。

高田は得三を見て声をかけ、「赤城様、今晚は。得三は出迎えて、「これは高田様でございますか。まあ、こちらへ。と二階なる密室に導きて主客三人の座は定まりぬ。高田は笑ましげに巻蓆を吹して、「早速ながら、何は、令嬢は息災かね。「ええ、お藤の事でございますか、「左様さ、私の情婦、ははははは。と溶解けんばかりの顔色を、銀平は覗きて追従笑い、「ひひひひ。得三は苦笑いして、「藤は変った事はございません。御約束通り、今夜貴下に差進げるが。……実は下枝ね。「ははあ。「あれが飛んだことになりました。「ふむ、死にましたろう。だから言わないことか、あんなに惨いことをなさるなど。とうとう責殺したね。非道ことをしなすった。「いえ、死んだのならまだしも可いが、どうしてか逃げました。「なに！ 遁げたえ？「それで今捜しに出ようとい

うところですよ。」「むむ、それはとんだ事だ。猶予をしちや不可いけません。あの嬢こが饒舌しゃべると一切の事が発覚ばれつちまう。宜しい銀平にお任せなさい。のう、銀平や、お前はそういうことには馴なれているから、取急いで探しておあげ申しな。と命いのちくれば得三も、探偵うかがに窺うかがることを知りたれば、家を出でむは気懸りなりしに、これ幸さいわいと銀平に、「じや御苦労だが、願います。私どもは後にちつと用事があるから。といえ、もとより同ひと穴つあなの貉むじなにて、すべてのことを知るものなれば、銀平は領うなずきて、「へい宜しゅうございます。下枝様がああいう扮装みなりのまま飛出したのなら、今頃は鎌倉中の評判になつてゐるに違いありません。何をいおうと狂氣きちがいにして引張ひっぱつて参ります。血だらけのあの姿じゃ誰だつて狂氣きちがいということを疑いませぬ。旦那、左様なら、これから直ぐに。と立上るを得三は少時しばしと押止め、「例のな、承知でもあろうが、三日月探偵がこつちへ来ているから、油断のないように。と念を入るれば、「それは重々容易ならぬことだ。銀平すっかりやつてくんな。と高田も言を添そえにける。銀平とんと胸を叩きて、「御配慮おきづかいなされますな。と気軽に飛出し、表門の前を足早ゆきかに行懸れば、前途むこうより年少わかき好男子の此方こなたに來懸るにはたと行逢いけり。擦違すり違いうて兩人ふたり齊ひとしく振返り、月明つきあかりに顔を見合ひしが、見も知らぬ男なれば、銀平はそのまま歩を移しぬ。これぞ倉瀬泰助が、悪僕八蔵を打倒して、今しもここに來れるなりき。

九 破廂

泰助は昼来て要害を見知りたれば、その足にて直ぐと赤城家の裏手に行き、垣の破目やれめを潜りて庭に入りぬ。

目も及ばざる広庭の荒たきままに荒果てて、老松ろうしょうこさん古杉陰暗く、花無き草ども生茂りて踏むべき路も分難し、崩れたる築山あり。水の洞れたる泉水あり。倒れかけたる祠ほこらには狐や宿を藉りぬらん、耳許みみもと近き木の枝にのりすれのりすれ梟ふくろうの鳴き連るる声いと凄まじ、木の葉を渡る風はあれど、塵を清むる箒無ければ、蜘蛛の巣ばかり時を得顔に、霞を織る様哀なり。妖物屋敷と言合えるも、道理なりと泰助が、腕拱こまぬきてぞみたる、頭上の松の茂を潜りて天より颯と射下す物あり、足許にはたと落ちぬ、何やらんと拾い見るに、白き衣切きぬぎれようものものに、礫いしこを一つ包みてありけり。押開きて月に翳せば、鮮々なまなましき血汐さにて左の文字もんじを認めたり。

虐殺なぶりころしにされようとする女が書きました。どうぞ、この家の内やから助け出して下さいまし。……書様の乱れたる字の形の崩れたる、筆にて運びし物にはあらじ。思うに指など

喰い切りてその血をその手ににじり書き、句の終りには夥しく血のぬらぬらと流れたるを見て、泰助はほろりと落涙せり。

これを投げたるは、下枝か、藤か。目も当てられぬことどもかな。いで我来れり、泰助あり、今夜の中に地獄より救い取りて、明日はこの世に出し参らせむ。そもいづくより擲ちたらんと高樓を打仰げど、それかと見ゆる影も無く、森々と松吹く風も、助けを呼びて悲しげなり。屹と心を取直し、丈に伸びたる夏草を露けき袖にて押分け押分けなお奥深く踏入りて忍び込むべき処もやと、彼方此方を経歴るに、驚くばかり広大なる建物の中に、住む人少なければ、燈の影も外へ洩れず。破廂より照射入る月は、崩れし壁の骨を照して、家内寂寞として墓に似たり。ややありて泰助は、表門の方に出で、玄関に立向い、戸を推して試むれば、固く内より鎖して開かず。勝手口と覺しき処に行きて、もしやと引けども同じく開かず。いかにせんと思ひしが、ふと錠前に眼を着くれば、こは外より鎖せしなり。試みに袂を探りて、悪僕より奪い置きたる鍵を嵌むれば、きしと合いたる天の賜物、「占めた。」と捻じれば開くにぞ、得たりと内へ忍び入りぬ。

暗闇を歩むに馴れたれば、爪先探りに蹙音を立てず。やがて壇階子を探り当て、「これで、まず、仕事に一足踏懸けた。と耳を澄まして窺えど、人の氣附たる様子も無け

れば、心安しと二階に上りて、壁を洩れ来る月影に四辺を屹と見渡せば、長き廊下の両側に比々として部屋並べり。大方は雨漏に朽ち腐れて、柱ばかり参差と立ち、畳は破れた天井裂け、戸障子も無き部屋どもの、昔はさこそと偲はるるが、一い二ウ三いと数うるに勝えず。遙か彼方に戸を閉じたる一室ありて、燈火の灯影幽かに見ゆるにぞ、要こそあれと近附きて、ひたと耳をあてて聞くに、人のあるべき氣勢もなければ、潜かに戸を推して入込みたる、此室ぞかの人形を置ける室なる。

垂れ下したる日蔽は、これ究竟の隠所と、泰助は雨戸とその幕の間に、電のごとく身を隠しつ。と見れば正面の板床に、世に希有しき人形あり。人形の前に坐りたる、十七八の美人ありけり。

泰助は呼吸を殺してその様を窺えば、美人は何やらむ深く思い沈みたる風情にて、頭を低れて傍目もふらず、今泰助の入りたることは少しも心附かざりき。額襟許清らに見え、色いと白く肉置き好く、髪房やかに結いたるが、妖艶なることはいわむ方無し。美人は正坐に堪えざりけん、居坐乱して泣きくずおれ噉り上げつつ独言よう、「ああ悪人の手に落ちて、遁げて出ることは出来ず、助けて下さる人は無し。あの高田に汚されぬ先に、いつそこのまま死にたいなあ、お姉様はどう遊ばしたかしら、定めし私と同じ様に。」と

横に倒れて唯^{ひたなき}泣に泣きけるが、力無げに起直り赤めたる眼を袖にて押拭^{おしぬぐ}いて、件の人形に打向い、「人形や、よくお聞き。お前はね、死^{おなくなり}亡遊ばした母^{おっかさん}様に、よく顔が肖^にておいでだから、平常姉様^{いっねえさん}と二人して、可愛がつてあげたのに、今こんな身になっているのを、見ていながら、助けてくれないのは情ないねえ、怨めしいよ。御覧な、誰も世話をしないから、この暑いのに綿の入った衣服を着ておいでだよ。私を旧^{もと}のようにしておくれだったら、甘味^{おいし}御膳^{ごぜん}も進^あげようし、衣服も着換えさせますよ。お前のに綺麗な衣服を、姉様と二人で縫い上げて、翌日^{あす}は着せてあげようと楽しみにして寝た晩から、あの邪慳^{じゃけん}な得三に、こうされたのはよく御存じでないかい。今夜は高田に恥かしめられるからさあ、どうかして下さいてばよう。ええ、これほどうのに返事もしないかねえ。とひしと上臈の腰に縋^{すが}りて、口説きたるには、泰助も涙ぐみぬ。

美人はまた、「あれ堪忍して下さいましよ。貴女^{あなた}は仮にも母^{おっかさん}様、恨みがましいことを申して済みませんでした。でももう神様も、仏様も、妾^{わたし}を助けて下さらないから、母様どうぞ助けて下さい。そうでなくば、私を殺して早うお傍^{そば}に連れて行って下さいまし、よ、よ。と力一杯抱緊^{だきし}めて、身を震わせば人形もともにわななくごとくなり。

泰助は見るに忍びず。いでまずこの嬢^こを救い出^{いだ}さん、家の案内は心得たれば背負うて遁

げんに雑作は無しと幕を掲げて衝と出でたり。不意に驚き、「あれ。と叫びて、泰助声をも懸けざるに、身を翻して、人形の被を潜つて入るよと見えし、美人は消えて見えなくなりぬ。あまりの不思議に呆氣に取られ、茫然として眼をばちばち、「不思議だ。不思議と泰助は、潜かに人形の被の端へ片手を懸けたる折こそあれ。部室の外にどやどやと蹙音して、二三人が来れる様子に、南無三宝飛び退りて再び日蔽の影に潜みぬ。

十 夫婦喧嘩

高田の下男銀平は、下枝を捜し出さんとて、西へ東へ彷徨つ。巷の風説に耳を聳て、道行く人にもそれとはなく問試むれど手懸り無し。南を指して走りしと得三の言いたれば、長谷の方に行きて見んと覺束のうは思えども、比企が谷より滑川へ道を取つて行懸り、森の中を通るとき、木の根を枕に叢に打倒れたる者を見たり。

時すら悪き病疾に罹れるやらむ、近寄りては面倒、と慈悲心無き男なれば遠くより素通りしつ。ましてしばし人を尋ぬる身にしあれば、人の形をなしたる物は、何まれ心を注ぐべきなり。と思ひ返して傍に寄り、倒れし男の面体を月影にてよく見れば、かねて知己

なる八蔵の齒を喰^く切りて呼吸^{いき}絶えたるなり。銀平これはと打驚き、脈を押えて候^うえば遙^{かす}かに通う虫の呼吸、呼び活けんと声を張上げ、「八蔵、やい八蔵、どうしたどうした、え、八蔵ッ、と力任せに二つ三つ 掴^{にぎり}拳^{こぶし}を撲^くわせたるが、死活の法にや協^{かな}いけん。うむと唸^{うめ}くに力を得て「やい、しつかりしろ。と励ませば、八蔵はようように、脾腹^{ひばら}を抱えて起上り、「あ痛^いつ、あ痛。……おお痛え、痛え、畜生^{ひど}非道いことをしやあがる。と渋面^{しぶ}つくりて銀平の顔を視^{なが}め、「銀平、遅かつたわやい。「おらあすんでの事で俗名八蔵と拝もうとした。「ええ、縁起でもねえ廃^よ止^してくれ。物をいうたびに腹へこたえて、こてえられねえ。「全体どうしたんだ。八蔵は頭を搔^かき搔^かきありし事ども物語れば、銀平は、驚きつまた便^{たより}を得つ、「ふむ、それでは下枝は滑川の八橋楼に居るんだな。「ああ、どうしてか紛れ込んだ。おらあ、窓から覗^{のぞ}いてたしかに見た。何とか工夫をして引摺り出そうと思つてゐる内に、泰助めが出懸ける様だから、早速跡を跟^つけて、まんまと首尾よくぶつちめる処を、さんざんにぶつちめられたのだ。忌^い々^{えま}しい。「可^よし一所に歩べ。行つて下枝を連れて歸^{けえ}ろう。「おつと心得た。「さあ行^ゆこうぜ。「参りまする参りまする。何かと申すうちに、はやここは滑川にぞ着きにける。

八橋楼の亭主得右衛門は、黄昏^{たそがれどき}時の混雜に紛れ込みたる怪しき婦人を、一室^{ひとま}の内に寢^{やす}

ませおき、心を静めさせんため、傍へは人を近附けず。時経たば素性履歴を聞き糺し、身に叶うべきほどならば、力となりて得させむず、と性質たる好事情。こうしてああしてこうして、と独りほくほく頷きて、帳場に坐りて脂下り、婦人を窺う曲者などの、万一入り来ることもやあらむと、内外に心を配りいる。

勝手を働く女房が、用事了うて襷を外し、前垂にて手を拭き拭き、得衛の前へとんと坐り、「お前様どうなさる気だえ。「どうするつて何をどうする。と空とぼければ擦寄つて、「何をもないもんだよ。分別盛りの好い年をして、という顔色の尋常ならぬに得右衛門は打笑い、「其方もいけ年を仕つてやくな。といえは赫となり、「気楽な事をおっしゃいますな。お前様見たような人を怪我にも妬く奴があるものか。「おや恐ろしい。何をそがみがみいうのだ。「ああいう婦人を宅へ置いてどんな懸合になろうも知れませぬ。「その事なら放棄ときな、おれが方寸にある事だ。ちゃんと飲込んでるよ。「だつてお前様、御主筋の落人ではあるまいし、世話を焼く事はござりませぬ。「お前こそ世話を焼きなさんな。「いいえ、ああして置くときつと庄屋様からお前を呼びに来て、手詰の応対、寅刻を合図に首討つて渡せとなります。「その時は例の贗首さ。「人を馬鹿にしていらつしやるよ。「そうして娘は居ず、さしずめ身代にお前さね。「とんでもない。

「うんや喜こぼし。「なぜ喜ぶの。「はて、あの綺麗首の代りにたてば、お前死んでも浮ばれるぜ。「ええ悔しい。「悔しい事があるものか。首実検に入れ奉る。死相変じてまッそのとおり、ははははは。「お前はなあ。「これ、古風なことをするな。呼吸が詰る、これさ。「鶏が鳴いても放しはしねえ。早く追い出しておしまいなさい。「水を打懸けるぞ。「啖い附くぞ。「苦、痛、ほんとに啖ついたな。この狂女め、と振払う、むしやぶりつくを突飛ばす。がたぴしという物音は皿鉢飛んだ騒動なり。
 おもてうかが
 外に窺う、八蔵、銀平、時分はよしとぬつと入り、「あい、御免なさいまし。」

十一　みるめ、かぐはな

「はい、光来なさいまし、何ぞ御用。と得右衛門居住い直して挨拶すれば、女房も鬢のほつれ毛搔き上げつつ静まりて控えたり。銀平は八蔵に屹と目注せして己はつかつかと入込めば、「それお客様御案内と、得衛の知らせに女房は、「こちらへ。と先に立ち、奥の空室へ銀平を導き行きぬ。道々手筈を定めけむ、八蔵は銀平と知らざる人のごとくに見せ、その身は上口に腰打懸け、四辺をきよろきよろ見廻すは、もしや婦人を尋ねにかと得

右衛門も油断せず、顔打守りて、「貴方は御泊ではございませんか。と問えばちよつとは答せず、煙草たばこ一服思わせぶり、とんとはたきて煙管きせるを杖、「親方、逢わしておくんねえ。と異おつにからんで言懸おつくれば、それと察して轟とどろく胸を、押鎮めてぐつと落着き、「逢わせとはそりや誰に。亭主ならば私じや、さあお目に懸かりましよ。と此方こなたも負けずに煙草をすばすば。八蔵は肩を動ゆすつてせせら笑い、「おいらが媽々かかが来ている筈、ちよいと逢おうと思つて来た。「ふむ、してどんな御婦人だね。「ちと気が狂ふれて血相変り、取乱してはいるけれど、すらつとして中肉中脊、戦慄ぞつとするほど美しい女さ。と空そらうそぶ嘯けずねいて毛脛の蚊をびしやりと叩く憎体面にくていづら。かくてはいよいよかの婦人の身の上思い遣られたり、と得衛は屹きつと思案して、「それは大方門違い、私の代になつてから福の神は這入はいつても狂人きちがいなどいう者は、門端かどばたへも寄り附きません。と思いの外の骨の強さ。八蔵は本音を吐き、「おい、可加減いいに巫山戯ふざけておけ。これ知るまいと思つても、先刻さつきちゃんと睨にらんでおいた、ここを這入つて右側の突つきあたり当の部室へやの中に匿藏かくまつてあらうがな。と正面より斬つて懸かれば、ぎよつとはしたれど受流して、「居たらまた何とする。「やい、やい、馬鹿落着に落着おちつくかない。亭主の許さぬ女房を蔵かくしておけば姦通まおとこだ。足許あしもとの明るい内に、さらけ出してお謝罪わびをしろと、居丈高に詰寄れば、「こりや可笑おかしい、お政府かみに税を差上げて、天下晴れての宿屋

なら、他人の妻でも妾でも、泊めてはならぬ道理は無い。それとも其方の女房ばかりは、
 泊めるなという掟があるか、さあそれを聞うかい。と言われて八蔵受身になり、むむ、と
 詰りて頬脹らし、「何さ、そりや此方の商売じや、泊めたが悪いというではない。用があ
 るから亭主の我が連れて帰るに故障はあるまい。といわれて否とは言われぬば、得衛もぐ
 っと行詰りぬ。八蔵得たりと畳みかけて、「さあ、出して渡してくれ、否と言うが最後だ。
 とどつかと坐して大胡坐。得右衛門思い切つて「居さえすれば渡して進ぜる、居らぬが
 実じやで断念さつし。と言わせも果てず眼を怒らし、「まだまだ吐すか面倒だ。踏み込
 んで連れて行く、と突立上れば、大手を拡げ、「どっこい遣らぬわ、誰でも来い、家の亭
 主ここに控えた。「何をと、八蔵は隠し持つたる鉄棒を振翳して飛懸れば、非力の得
 衛仰天して、蒼くなつて押隔つれど、腰はわなわな気はあぶあぶ、困じ果てたるその処へ
 女房を前に銀平が一室を出でて駈け来りぬ。

銀平は何思いけん、勢に乗る八蔵を取つて突除けずいと立ち、「勾引の罪人、御用だッ。
 と呼ばわれれば、八蔵もまた何とかしけむ、「ええ、と吃驚身を翻がえして、外へ遁出し
 雲を霞、遁がすものかと銀平は門口まで追懸け出で、前途を見渡し独言、「素早い、
 野郎だ。取遁がした、残念々と引返せば、得右衛門は興覚顔にて、「つい混雑に紛れま

して、まだ御挨拶も申しません。貴下は今しがた御着になった御客様、さてはその筋の。と敬えば、銀平したり顔に打領うちうなずき、「応うむ、僕は横須賀の探偵だ。」

遁げると見せかけ八蔵は遠くも走らず取つて返し、裏手へ廻つて墓所はかしよに入り、下枝が臥ふしたる部室へやの前に、忍んで様子を窺うかがえり。

横須賀の探偵に早替りせる銀平は、亭主むかに向いて声低く、「実は、横須賀のさる海軍士官の令嬢が、江の島へ参詣さんけいに出懸けたまま、今もつて、帰つて来ない。と口より出任せの嘘を吐つけど、今の本事てなみを見受けたる、得右衛門は少しも疑わず。真に受けて、「なるほどなるほど。と感じ入りたる体なり。銀平いよいよ図に乗り、「ええ、それで必定てつきりかどわ誘拐かくまされたという見込でな。僕が探偵の御用を帯びて、所々方々と捜している処だ。」「御道理ごとも。」「先刻さつきからの様子では、お前の処に誰か婦人を蔵匿かくまつてある。それをば悪者が嗅かぎ出して、奪返しに來た様子だが。……と言いつつ亭主の顔を屹きつと見れば、鈍おそや探偵と信じて得右衛門は有体に、「左様、その通り。実はこれこれの始末にて。と宵よりありし事柄を落も無くいうてのくれば、銀平はしてやつたりと肚はらに笑みて、表面うわべにますます容体を飾り、「ははあ、御奇特の事じや、聞く処では年齢と言ひ、風体と言ひ、全く僕が尋ねる令嬢に違ひない。いや、追つてその許に、恩賞の御沙汰これあるよう、僕から上申を致そ

う、たしかにそれが見たいものじゃが、というに亭主はほくほく喜び、見事善根をしたる所存、傍かたえぎき聞きこする女房を流しりめ晒めに懸かけて、乃公だいこうの功名まッこのとおり、それ見たかといわぬばかり。あわれ銀平が悪智慧に欺あやむかれて、いそいそと先達して、婦人を寝やすませおきたる室へ、手燭てしよくを取つて案内せり。

前には八蔵驚破すわといわばと、手ぐすね引きて待懸けたり。後には銀平が手も無く得右衛門に一杯くわして、奪はい行かむと謀はかりたり。わずかに虎口のを遁のがれ来て、仁者の懷に潜ひそみながら、毒蛇の尾にて巻まかれたる、下枝が不運憐むべし。

十二 無理強迫

赤城家にては泰助が、日蔽ひおおいに隠れし処へ、人形室の戸を開きて、得三、高田、老婆お録、三人の者入いりきた来りぬ、程好き処に座を占めて、お録は携たずさえ来りたる酒と肴さかなを置おき排ならべ、大洋燈おおらんぷに取替えたれば、室内照りて真昼のごとし。得三その時膝押向け、「高田様さん、じや、お約束通り証文をまいて下さい。高田は懷中より証書を出いだして、金一千円也と、書きたる処を見せびらかし、「いかにも承知は致したが、まだ不可いけません。なにしました

ら、綺麗さっぱりとお返し申そうまずそれまでは、とまた懷へ納め、頤を撫でている。

「お録、それぞれ。と得三が促し立つれば、老婆は心得、莞爾やかに高田に向いて、「おめでとう芽出度存じます。唯今花嫁御を。……と立上り、件の人形の被を掲げて潜り入りしが、

「じたばたせずにおいでなさい、という声しつ。今しがた見えななりたる、美人の小腕を邪慳に掴みて、身を脱れんと悶えあせるを容赦なく引出しぬ。美人は両手に顔を押えて身を縮まして戦きいたり。

得三これを打見遣り、「お藤、かねて言い聞かした通り、今夜は媚を授けてやるぞ。さぞ待遠であつたろうの。と空嘯きて打笑えば、美人はわつと泣伏しぬ。高田はお藤をじろりと見て、「だが千円は頗る高直だ。『考えて御覧なさい。これ程の玉なら、潰に売つたつて三年の年期にして四五百円がものはあります。それを貴下は、初物をせしめるばかりか、生涯のなぐさみにするのなもの、こちらは見切つて大安売だ。千円は安価いものだね。』「それもそうじやな。どれ、一つ杯を献そう。この処ちよいとお儀式だ。と独り喜びの助平顔、老婆は齒朶を露き出して、「直と屏風を廻しましょうよ。『それが可い』と得三は領きけり。虎狼や梟に取囲まれたる犠牲の、生きたる心地は無き娘も、酷薄無道のこの談話を聞きたる心はいかならむ。絶えも入るべき風情を見て、得三は叱るように、

「おい、藤。高田様がお盃を下さる、頂戴しろ。これッ、人が物を言うに返事もしないかと声荒らかに呼わりて、掴み挫がん有様に、お藤は霜枯の虫の音にて、「あれ、御堪忍なさいまし。」「何も謝罪する事アねえ。機嫌よくお盃を受けろというのだ。ええ、忌々しい、めそめそ泣いてばかりいやあがる。これお録、媒灼人役だ。ちと、言聞かしてやんな。老婆は声を繕いて、「お嬢様、どうしたものでございますね。御婚礼のお目出度に、泣いていらしつちやあ済ません。まあ、涙を拭いて、婿様をお見上げ遊ばせ。どんなに優しいお顔でございましょう。それはそれは可愛がつて下さいますよ、ねえ旦那様、と苦笑い、得三は「そうともそうとも。」「ほんとに深切な御方つちやアありません。不足をおっしゃては女冥利が尽きますすによ。貴女お恥かしいのかえ、と舐めるがごとく撫廻せば、お藤はからだを固うして、頭を掉るのみ答えは無し。高田はわざと怒り出し、「へん、好い面の皮だ。嫌なものなら貰いますまい。女早はしはしまいし。工手間が懸るんなら破談にするぜ。と不興の体に得三は苛立ちて、「汝、洩太い阿魔だな。といいさまお藤の手を捉うれば、「あれえ。」「喧しいやい。と白き頸を驚掴み、「この阿魔、生意気に人好をしやあがる。汝どうしても肯かれないか。と睨附くれば、お藤は声を震わして、「そればかりは、どうぞ堪忍して下さいまし。と諸手を合すいじらしさ。」「応、肯かれないな。よし、

肯かれなきやあ無理に肯かすまでのことだ。して見せる事があるわい。というは平常の折檻つかんぞとお藤は手足を締めすく紛る。得三は腕まくりして老婆を見返り、「お録、一番責めなきや埒らちが明くめえ。お客の前でもき廻ると見苦しい、ちよいと手を貸してくれ。老婆はチョツと舌打して、「ても強情なお嬢こだねえ。といいさま二人は立上りぬ。高田は高見に見物して、「これこれ台無しにしては悪いぜ。「なあに、売物だ。面つらに疵きずはつけません。

泰助は、幕の蔭よりこれを見て、躍り出いでんと思えども、敵は多し身は単ひとつ、湍はやるは血氣の不得策、今いうごとき情実なれば、よしや殴打おうだをなすとても、死に致す憂うれいはあらじ。捕縛してその後に、渠等かれらの罪を数うるには、娘を打たすも方便ならんか、さはさりながらいたましし、と出るにも出られずとつおいつ、拳こぶしに思案を握りけり。

得三はかねてかくあらんと用意したる、弓の折おれを振上ぐれば老婆はお藤の手を扼とりしりぬ。はつしと撲うたれて悲鳴を上げ、「ああれ御免なさいまし、御免なさいまし。と後うしろへ反り前そへ俯ふし、悶もだえ苦しみのりあがり、紅蹴返くれなす白脛しらはぎはたわけき心を乱すになむ、高田駄平は酔えるがごとく、酒打ち飲みていたりけり。

十三 走馬燈

無慙むざんやなお藤は呼吸いきも絶々に、紅顔蒼白く変りつつ、苛かし責やくの苦痛に堪えざりけん、

「ひい、殺して下さい殺して。と、死を決したる処女おとめの心。よしやこのまま撲殺うちころすとも、随うくも見えざれば、得三ほとんど責せめ倦あぐみて、腕うでを擦さすりて咎しもとを休めつ。老婆はお藤を突放せば、身を支うべき氣力も失せて、はたと僵たおれて正体無し。

得三は、といきを吐つきて高田に向い、「御覽の通りで仕様がありません。式作法には無いことだが、お藤の手足をふん縛しばつて、そうして貴下あなたに差上げましょう、のう、お録、それが可いいじゃないか。「それが好ようございます。その後は活いすとも殺すとも、高田様さんの御存分になさいましたら、ねえ旦那。といえは得三引取つて、「ねえ高田様さん。駄平は舌舐したなめずりして、「慾よくにも得にももうとてもじやわい。そうして貰もらいましょうよ。「では証文をな。「うう、承知、承知。ここに恐しき相談一決して、得三は猶予ゆうよなく、お藤の帯に手を懸けぬ。娘は無念さ、恥かしさ。あれ、と前棲まえづま引合して、踰跟ようめきながら遁にげんとあせる、裳もすそをお録が押うれば、得三は帯際おびぎわ取つて屹きつと見え。高田は扇あふを颯さつと開き、骨の間あいから覗のぞいて見る。知らせにつき道具廻る。

さても得右衛門は銀平を下枝の部屋いまに誘いざない引つ、「此室ここに寝さしておきました。と部屋

の戸を曳開くれば、銀平の後に続き、女房も入って見れば、こはいかに下枝の寢床は藻脱の殻、主の姿は無かりけり。「や。「おや。「これは、と三人が呆れ果てて言葉も出でず。

銀平は驚きながら思うよう、亭主はあくまで探偵と、我を信じて疑わねば、下枝を別の部屋に蔵して、我を欺くびようもなし。こは必ず八蔵が何とかして便を得て、前に奪い出だせるならん。さすれば我はこの家に用無し。長居は無益と何気無く、「これは、怪しからん。ふとすると先刻遁失せた悪漢が小戻して、奪い取ったかも知れぬ、猶予する処でない。僕は直ぐに捜しに出るといわれて亭主は極悪げに、「飛んだことになりました、申訳がございません。「なあに貴下の落度じゃない、僕が職務の脱心であつた。いやしからば。と言いつつ、とつかわ外へ立出でて雪の下へと引返せば、とある小路の小暗き処に八蔵は隠れいつ、銀平の来かかるを、小手で招いて、「おい、ここだよ。」

お藤は得三の手籠にされて、遂には帯も解け広がりぬ。こは悲しやと半狂乱、ひと人形に抱き附きて、「おつかさん！ と血を絞る声。世に無き母に救を呼びて、取り纏る手を得三がもぎ離して捻じ上ぐれば、お録は落散る腰帯を手繰ってお藤を縛り附け、座敷の真中にずるずると、鬚を掴んで引出し、押しつけぬ。形怪しき火取虫いと大きな

るが、今ほど此室に翔り来て、赫々たる洋燈の周囲を、飛び廻り、飛び狂い、火にあくがれていたりしが、ぱつと羽たたき火屋の中へ逆さまに飛び入りつ、煽動に消える火とともに身を焦してぞ失せにけり。

颯と照射入る月影に、お藤の顔は蒼うなり、人形の形は朦朧と、煙のごとく仄見えつ。靈山に撞く寺の鐘、丑満時を報げ来して、天地寂然として、室内陰々たり。

かかりし時、いずくともなく声ありて、「お待ち！　と一言呼ばわり叫びぬ。

思いがけねば、得三等、誰そやと見廻す座敷の中に、我々と人形の外には人に肖たらむ者も無し。三人奇異の思いをなすうち、誰が手を触れしということ無きに人形の被すらりと脱け落ちて、上臈の顔頭われぬ。啊呀と顔を見合す処に、いと物凄き女の声あり。

「無法を働く悪人等、天の御罰を知らないか。そういう婚姻は決してなりません。」

幕の内なる泰助さえ、この声を怪しみぬ。前にも既に説うごとく、この人形は亡き母として姉妹が慕い斉眉物なれば、宇宙の鬼神感動して、仮に上臈の口を藉りかかる怪語を放つらんと覚えず全身粟生てり。まして得三高田等は、驚き恐れつ怪しみて、一人立ち、二人立ち、次第に床の前へ進み、熟と人形を凝視つつ三人は少時茫然たり。

機こそ来たれ。と泰助が、幕を絞つて頭われたり。名にし負う三日月の姿をちらと見せ

るとおもえば、早くもお藤を小脇に抱き、身を翻えして部屋を出でぬ。まことに分秒電火の働き、一散に下階へ駈下りて、先刻忍びし勝手口より、衝と門内に遁れ出づれば、米利堅産種の巨犬一頭、泰助の姿を見て、凄まじく吠え出せり。

南無三、同時に轟然一発、頭を覗つて打出す短銃。

幸い狙いは外れたれど泰助はやや狼狽して、内より門を開けんとすれば、登然たる足音門前に起りて、外よりもまた内に入らんとするものありけり。

泰助蒼くなりて一足退れば、轟然たり、短銃の第二発。

いとも危うく身を遁れて、泰助は振返り、屹と高樓を見上ぐれば、得三、高田相並んで、窓より半身を乗出し、逆落しに狙う短銃の弾丸は続いて飛来らん。その時門の扉を開きて、つツと入るは銀平、八蔵、連立ちて今帰れるなり。

さすがの泰助も度を失いぬ。

短銃の第三発轟然。

十四 血の痕

贗探偵の銀平が出去りたる後、得右衛門はなお不審晴れ遣らねば、室の内を見廻るに、
 畳に附たる血の痕あり。一箇処のみか二三箇処。ここかしこにぼたぼたと溢れたるが、敷
 居を越して縁側より裏庭の飛石に続き、石燈籠の辺には断えて垣根の外にまた続けり。こ
 は怪やと不気味ながら、その血の痕を拾い行くに、墓原を通りて竹藪を潜り、裏手の田
 圃の畦道より、南を指して印されたり。

一旦助けんと思ひ込みたる婦人なれば、このままにて寐入らんは口惜し。この血の跡を
 慕い行かばその行先を突留め得べきが、單身にては気味悪しと、一まず家に立歸りて、近
 隣の壮佼の究竟なるを四人ばかり語らいぬ。

各々興ある事と勇み立ち、読本でこそ見たれ、婦人といえど土蜘蛛に縁あり。さしず
 め我等は綱、金時、得右衛門の頼光を中央にして、殿に貞光季武、それ押出せと
 五人にて、棍棒、鎌など得物を携え、鉢巻しめて動揺めくは、田舎茶番と見えにけり。

女房は独り機嫌悪く、由緒なき婦人を引入れて、蒲団は汚れ畳は台無し。鶏卵の水のと
 喰べさせて、一言の礼も聞かず。流れ渡った洋犬でさえ骨一つでちんちんお預はするも
 のを。おまけに横須賀の探偵とかいう人は、茶菓子が無銭でせしめて去んだ。と苦々しげ
 に呟きて、あら寝たや、と夜着引被ぎ、亭主を見送りもせざりける。

得右衛門を始めとして四人の壮佼は、茶碗酒にて元気を養い一杯機嫌で立出でつ。
惜しや暗夜やみなら松明たいまつを、点ともして威勢は好よからんなど、語り合いつつ畦伝い、血の痕を踏
んで行く程に、雪の下に近づきぬ。金時真先まつさきに二の足踏み、「得右衛門もう帰ろうぜ。
と声の調子も変になり、進みかねて立止まれば、「これさお主ぬしはどうしたものだ。と言
励す得右衛門。綱は上意を承り、「親方、大人気無い、廃止よしにしましょう。余所よそなら可
が、雪の下はちと、なあ、おい。と見返れば貞光が、「そうだともそうだとも、もうかれ
これ十二時だろう。という後しりにつき季武は、「今しがた靈山の子刻このつを打った、これから
先が妖物ばけものの夜世界よ。と一同に逡巡しりごみすれば、「ええ、弱虫めら何のこれたかが幽霊だ。
腰の無い物なら相撲を取ると人間の方が二本足だけ強身だぜ。と口にはいえど己おのれさえ腰よ
り下は震えけり。金時は頭こうべを掉ふり、「なに鬼や土蜘蛛なら、糸瓜へちまとも思わねえ。」「己おれもさ、
狒々ひひや巨蛇うわばみなら、片腕で退治て見せらあ。」「我おいらだって天狗の片翼を斬って落すくらいな
ら、朝飯前だ。」「ここにも狼の百足は立処に裂いて棄てる強者つわものが控えておると、口から
出任せ吹き立つるに、得右衛門はあてられて、「豪気えらいえらい々々、その口で歩行あるいたら足よりは
達者なものだ。さあ行ゆこうかい。といえどんじりの季武が、「ところが、幽霊は大嫌否きらい
さ。」「弁慶も女は嫌否かッ。」「宮本無三四むさしは雷らいに恐れて震えたという。」「遠山喜六という

先生は、蛙を見ると立竦たちすくみになったとしてある。

「金時ここにおいてか幽霊が大禁物。」「綱もすなわち幽霊れこには恐れる。といわれて得右衛門大きに弱り、このまま帰らんは余り腑甲斐ふがい無し、何卒なにとぞして引張り行かん。はて好い工夫はおつとある。」「どうだ。一所に交際つきあつてくれたら、翌日あすとは言わず帰り次第藤沢（宿場女郎の居る処）を奢おごつてやるが、と言えは四人顔見合わせ、「なるほどたかの知れた幽霊だ。」「この中に人を殺したものは無いから、まず命に別条はあるまい。」「むむ、背負おぶてくれがちと怪しいが、「ままよ行こうか、「おう。」「うむ。と色で纏まとまる壮佼等わかもものども、よしこの都々逸どどいつ唱い連れ、赤城の裏手へ来たりしが、ここにて血の痕途断あととぎれたり。

得右衛門立停たちどまつて四辺あたりを見廻し、「皆待つたり。この家はどうかやら、例の妖物屋敷ばけものらしいが、はてな。して見るとあの婦人おんなも化生けしやうのものであつたか知らん。道理で来てから帰るまで変なことづくめ、しかし幽霊でも己おれが一廉いつかどの世話をしてやったから、空あだとは思ふまい。何のせいだかあの婦人おんなは、心から可愛かわゆうて不便ふびんでならぬ。今じや知己ちかづきだから恐しいとも思わぬわい。おい、おらあ、一番表へ廻つて見て来るから、一所に来い。といえども一人として応ずる者無し。」「そんなら待つていろ、どれ、幽霊に逢うて来ましよ。と得右衛門ただ一人、板塀を廻つて見えずなりぬ。

四人の壮佼は、後に残りて、口さえもよう利かれず。早夜は更けて、夏とはいえど、風冷々と身に染みて、戦慄と寒氣のさすほどに、酔さえ醒めて茫然と金時は破垣に依懸り、眠気つきたる身体からだの重量おもみに、竹はめつきと折れたりけり。そりやこそ出たぞ、と驚き慌て、得右衛門も待ち合えず、命からがら遁帰りぬ。

十五 火に入る虫

短銃ピストルの筒口に濃き煙の立つと同時に泰助が魂消る末期の絶叫、第三発は命中せり。渠は立竦たぢすくみになりてぶるぶると震えたるが、鮮血なまぢたらたらと頬に流れつ、抱きたるお藤をどうと投落して、屏風びょうぶのごとく倒れたり。

それと見て駈け寄る二人の悪僕、得三、高田、お録もろとも急ぎ内より出で来りぬ。高田はお藤を抱き上げて、「おお、可哀相にさぞ吃驚びっくりしたろう、すんでのことで悪漢わるものが誘拐かどわかそうとした。もう好いよわい、泣くな泣くな。と背搔撫せなかいなでて助いたわれば、得三もほつと呼吸き、「あ、好かった。何者だ、大胆な、人形が声を出したのに度胆を抜かれた処へ幕うしろの後から飛出しやあがつて、ほんとに驚いたぜ。お録、早く内へ連れて行きな。「へい承りかしこまま

した。と高田の手よりお藤を抱取り肩に掛けて連れて行く。

「まず、安心だ。うん八蔵けえ帰ったか、それその死骸しがいの面つらを見いと、指図くさむに八蔵心得て叢

中らなかより泰助ひきずを引摺り出し、「おや、此奴こいつあ探偵だ。我われを非道ひどい目に逢わしやあがつた。

「何、どうしたと、殺り損やそくなつて反対あべこべに当身あてみを喰くらつた。それだから虚気うつかり手を出すなど言

わねえことか。や、銀平殿お前もお帰りか。「はい、旦那唯今。「うむ、御苦労、なに下

枝様さんはどうじゃ。「早速ながら下枝奴めは知れましたか。と二人ひと齊ひとしく問懸くれば、銀平、

八蔵交かたみがわり代わりに、八橋楼にての始末を語り、「それでね、いざという段になつて部屋へ這

入ると御本人様さんどこへ消えたか見えなくなりました。これは八蔵殿どんが前さきへ廻つて連出した

のかと思つた処が、のう八蔵殿。「おおさ、己も墓場おれの方で、銀平様さんの合図を待つてまし

たが、別に嬢様おれの出て来る姿を見附けませんで、「もうもう尋飽たずねあぐみ倦うまして、夜も更けま

すし、旦那方の御智慧を借りようと存じましてひとまず帰りました。というに得三頭こうべを傾

けやや久しく思慮かんがえいたるが、それにて思い当りたり。「して見ると下枝はまた家内うちへ帰

つて来たかも知れぬ。というのは、今しがた誰も居ないのに声が懸かつて、人形が物を言う

ていこたあ無い筈だと思つたが、下枝の業わざであつたかも知れぬわい。待て、一番家内ひとつうちを検しら

べて見よう。その死骸はな、よく死んだことを見極めて、家内うちの雑具部屋へ入れておけ。

高田様、貴下も御迷惑であろうが手伝つて下枝を捜して下さい。探偵は片附けてしまったト、これで下枝さえ見附ければ、落着いてお藤が始末も附けます。と高田を誘い内に入りぬ。

八蔵は泰助に恨あれば、その頭蓋骨は砕かれけん髪の毛に黒血凝りつきて、頬より胸に鮮血迸り眼を塞ぎ齒を切り、二目とは見られぬ様にて、死しおれるにもかかわらず。なお先刻の腹癒に、滅茶々に撲り潰さんと、例の鉄棒を捻る時、銀平は耳を聳てて、「待て！ 誰か門を叩くぜ。八蔵はよくも聞かず、「日が暮ると人ツ子一人通らねえこの辺だ。今時誰が来るもんか。といううち門の戸を丁、丁、丁、「お頼み申す。という声あり。

八蔵は急いで鉄棒押隠し、「いかさま、叩くわ。「探偵の合棒でも来はしねえか。己あ見て来る、死骸を早く、「合点だ。と銀平は泰助の死骸を運び去りつ。八蔵は門の際に到り、「誰だね。「へい私。「へい私では解らないよ。夜夜中けたたましい何の用だ。戸外にて、「ええ、滑川の者ですが、お家へ婦人が入つて来はしませんかい。八蔵は聞覚えあるたしかに得右衛門の声なれば、はてなと思い、「どんな女だ。「中肉中脊、凄いほど美しい婦人。と聞いて八蔵心可笑しく、「その様な者は来ない、何ぞまた此家へ来たという次第でもあるのか。「私どもの部屋から溢れて続いてる血の痕が、お邸の裏手で止まってお

ります。

さては下枝は得三が推量通り、再び帰りしに相違なからん。それはそれにて可いとして、少時なりとも下枝を藏匿たる旅店の亭主、女の口より言い洩して主人を始め我までの悪事を心得おらんも知れず。遁がしはやらじ、とやにわに門の扉を開けて、むずと得右衛門の手を捉え、「婦人は居るから逢わしてくる、さあ入れ。」と引入れて、門の戸はたと鎖しければ、得右衛門はおどおどしながら、八蔵を見て吃驚仰天、「やあ此方は先刻の、「うむ、用があるこつちへ来いと、力任せに引立てられ、鬼に捕らるる心地して、大声上げて救いを呼べど、四天王の面々はこの時既に遁げたれば、誰も助くる者無くて、哀や擒となりけり。」

十六 啊呀！

今は悪魔ばかりの舞台となりぬ。磨ぎ清したる三日月は、惜しや雲間に隠れ行き、縁の藤の紫は、厄難いまだ解けずして再び奈落に陥りつ、外より来れる得右衛門も鬼の手に捕られたり。さてかの下枝はいかならん。

さるほどに得三は高田とともに家内に入り、下枝は居らずや見えざるかと、あらゆる部屋を漁り来て、北の台の座敷牢を念のため開き見れば、射込む洋燈の光の下に白く蠢くもののあるにぞ、近寄り見れば果せるかな、下枝はここにぞ発見されたる。

かばかり堅固なる罫の内よりそもいかにして脱け出でけん、なお人形の後より声を発して無法なる婚姻を禁めしも、汝なるか。と得三は下枝に責め問い、疑を晴さんと思うめれど、高田はしきりに心急ぎて、早くお藤の方をつけよ。夏とはいえど夜は更けたり。さまざまに時刻後れては、枕に就くと鶏うたわむ、一刻の価値千金と、ひたすら式を急ぐになん。さはとて下枝を引起して、足あらばこそ歩みも出め、こうして置くにしくことあらじ。人に物を思わせたる報酬はかくぞと詈りて、下枝が細き小腕を後手に捻じ上げて、縛めんとなしければ、下枝は糸よりなお細く、眼を見開きて恨しげに、「もう大抵に酷うしたが好うござんしよう。坐っている事も出来ぬように弱り果てた私の身体、どこへも参りは致しませぬ。といえば得三冷笑い、「その手はくわぬわ。また出て失しようと思いやあがつて、へん、そう旨くはゆかないてや、ちつとの間の辛抱だ。後刻に来て一所に寝てやる。ふむ、痛いか様を見ろ。と下枝の手を見て、「おや、右の小指をどうかしたな、こいつは一節切つてあらあ。やい、どこへ行つて指切断をして来たんだ。と問いかかるを高田は押

止め、「まあまあ、そんな事ア何時でも可いいて。早く我われの方を、「はて、せわしない今行きます。と出血や休まざる小指の血にて、我わが掌てのひらの汚けれたるにぞ、かつぶと唾を吐き懸けて、下枝の袖にて押拭いい、高田と連立ち急がわしく、人形室に赴きぬ。後より八蔵入来り、こうこういう次第にて、八橋楼の亭主を捕とらえ、一室に押込め置きたるが、というに得三うなず領きて、その働はたらきを誉ほめそやし、後にて計らうべき事あり。そのままにして置きて、銀平と勝手にて酒を飲くんで寛くつろげ。と八蔵を去いなして手を打鳴し、「録よ、お録。と呼び立つれど、老婆は更いに答こたえねば、「はてな、お録といえさつば先刻から皆目姿を見せないが、ははあ、疲れてどこかで眠いつたものと見える。老年としよりというものはええ！ 埒うちの明かぬ。と眩つぶきつつ高田に向い、「どうせ横紙破りの祝言だ。媒なこうど灼も何も要いつた物ではない。どれ、藤を進あげますから。と例の被かずきを取除とりくれば、この人形は左の手にて小褌こつまを搔かき取り、右の手を上へ差伸べて被を支さうるものにして、上げたる手にてひるがえ翻ひるがえる、綾羅りようらの袖の八口と、めめたる錦にしきの帯との間に、人一人肩をすしばむれば這入らるべき透間あり。そこに居て壁を押せば、縦三尺幅四尺向うへ開く仕懸しかけにて、すべての機械は人形に、隠るる仕方巧みにして、戸にてなる壁の継目など、肉眼にては見分け難し。得三手てしよく燭そくにてこの仕懸を見せ、「平常ふだんは鎖じようを下してお藤を入れておくが、今晚は貴下あなたに差上げるので、開けたままだ。こちらへお入

り。と先に立ちて行く後より、高田も入りて見るに、壁の彼方にも一室あり。畳を敷くこと三畳ばかり。「いいちよんの間だ。と高田がいえば、得三呵々と打笑いて、「東京の待合にもこれ程の仕懸はあるまい。といいつつ四辺を見廻すに、今しがた泰助の手より奪い返してお録に此室へ入れ置くよう、命けたりしお藤の姿、またもや消えて見えざりければ、啊呀とばかり顔色変じぬ。

高田は太く不興して、「令嬢はどうしました。え、お藤様はどうしたんです。とせきこむにぞ、得三は当惑の額を撫で、「いやはや、お談話になりません。藤が居なくなりました。高田は顔色変え、「何だ、お藤が居なくなつたと?」「この通り、この室より外に入れて置く処はない。実に不思議でなりません。とさすがの得三も呆れ果てて、悄れ返れば高田は勃然として、「そういうことのあるう道理は無い。ふふん、こりやにわかにあの娘が惜しくなつたのだな。「滅相な。「いや、それに違いありません。隠して置いて、我を欺くのだ。「と思召すのも無理ではない。余り変で自分で自分を疑う位です。先刻から見えぬといい、あるいは婆々奴が連れ出しはしないかと思うばかりで、それより他に判断の附様がございませぬ。早速探し出しますで、今夜の処は何分にも御猶予を願いたい。と腰を屈め、揉手をして、ひたすら頼めどいっかな肯かず、「なんのかのと、体の可いこと

を言うが、婆々と馴れ合つてする仕事に極まつた。誰だと思ふ、ええ、つがもねえ、浜で火吸器すいふくべという高田駄平だ。そんな拙策あまてを喰う者か。「まあまあそう一概におつしやらずに、別懇の間に免じて。「別懇も昨今もあるものか。可よし我われもたつてお藤を呉れとは言わぬ。そん代でえに貸した金千円、元利揃えてたつた今貰おうかい。と証文眼前めさきに附着くれば、強情我慢の得三も何と返さん言葉も無く困こうじ果ててぞいたりける。

十七 同士討

高田はなおも詰寄りて、「妖物ばけもの屋敷に長居は無益むやくだ。直ぐ帰るから早く渡せ。「そりや借りた金だ抵当のお藤が居なくなれば、きつとお返済かえしすが、まだ家の財産も我が所有もにはならず、千円という大金、今といつては致方がございませぬ。どうぞ暫時しばらくの処を御勘弁。「うんや、ならねえ。この駄平、言い出したからは、血を絞つても取らねば帰らぬきりきりここへ出しなさい。と言ひ募るに得三は赫かつとして、「ここな、没分曉わからずや漢。無い者ア仕方がねえ。と足を出せば、「踏む気だな、可いいわ。踏むならば踏んで見ろ。おおそれながらと罷り出まかて、汝きさまの悪事を訴えて、首にしてやる覚悟しやあがれ。得三はぎよつとし

て、「何の、踏むなどという図太い了簡を出すものか。と慌つる状に高田は附入り、
「そんなら金を、さあ返済せ。」「今といつては何ともどうも。」「じゃ訴えて首にしようか。
「それはあんまり御無体な。」「ええ！ 面倒だ。と立懸れば、」「まあ、待つてくれ。と
袂を取るを、」「乞食め、動くな。と振離され、得三たちまち血相変り、高田の帯際むずと
掴みて、じりじりと引戻し、人形の後の切抜戸を、内よりはたと鎖しける。

何をかなしけむ。壁厚ければ、内の物音外へは漏れず。

ややありて戸を開き差出したる得三の顔は、眼据つて唇わななき、四辺を屹と見廻し
て、「八蔵、八蔵、と呼懸けたり。八蔵は入来りぬ。得三は声を潜め、「八、ちよつとこ
こへ来い。」「へい、何、何事でございます。と人形の袖を潜つて密室の戸口に到れば、得
三は振返つて後を指し、「これを。……八蔵は覗き込みて反り返り「ひやつ、高田様が自
殺をしたツ。と叫ぶを、「叱！ 声高しと押止めて、眼を見合わせ少時無言、この時
一番鶏の声あり。

得三は片頬に物凄き笑を含みて、「八蔵。という顔を下より見上げて、「へい。」「お前
にもそう見えるかい。」「何、何、何が。」「いやさ。高田の死骸は自殺と見えるか。」「へい。
自分で短刀の柄を握つてそして自分の喉を突いてれば誰が見ても全く自殺。」「応、たしか

にそう見える。が、実は我が殺したのだ。「ええ、お殺なすったか。「突然藤が居なくなつたぞ。八、先刻からお録は見懸けまいな。「へい、あの婆様はどこへ行つたか居りません。「そうだろう。彼奴もしたたか者だ。お藤を誘拐して行つたに違いない。あの嬢はまだ小児だ。何にも知らないから可し、老婆も、我等と一所に働いた奴だ。人に悪事は饒舌まい。惜くも無し、心配も無いが、高田の業突張、大層怒つてな。お藤がなくなつたら即金で千円返せ、返さなけりや、訴えると言い募つて、あの火吸器だもの、何といつても肯くものか。すんでに駈出そうとしやあがる。ままよ毒喰わば皿迄と、我が突殺したのだ。「それは好うございました。「すると奴さん苦しいものだから、拳でしつかりとこの通り短刀の柄を握つたのよ。「体の可い自殺でございますね。「そうよ。そこで己が旨い事を案じついたて。これからあの下枝を殺してさ。「下枝様を。「三年以来辛抱して、氣永に靡くのを待つていたが、ああ強情では仕様が無え。今では憎さが百倍だ。虐殺にして腹癒して、そうして下枝の傍に高田の死骸を僵して置く。の、そうすれば誰が目にも、高田が下枝を殺して、自殺をしたと見えるといふものだ。何と可い工夫であらうが。」

さりとは底の知れぬ悪党なり。八蔵は手を拍つて「旨い。と叫べり。「そうして己が口

の前でさき旨く世間を欺あざむけば、他に親類は無し、赤城家の財産はころりと我が手へ転がり込む。何と八蔵そうなる日にはお前に一割は遣るよ。「ええ難ありがた有い、夢になるな夢になるな。

「もうこれッ切り御苦労は懸けないが、もう一番頼ひとつまれてくれ。「へい、何なりとも。

「銀平はどうした。「しきりに飲んでおります。「彼奴あいつも序に片附けてしまいたい、家で

やっては面倒だから、これから飲直すといつて連出してな。「へいへい、なるほど。「ど

こかへ行つて酒を飲まして、ちよいと例の毒藥を飲ましかあ訳は無い、酔つて寝たように

なつて、翌日あすの朝はこの世をおさらばだ。「承かしこりました。しかし今時青楼おちやで起きていま

しょうか。「藤沢の女郎屋は遠いから、長谷はせあたりの淫売店じごくやどへ行けば、いつでも起きて

いらあ、一所にお前も寝て来るが可い。「じゃあ直ぐと参ります。「御苦労だな。「なん

の貴下あなた。と行懸くるを、「待て、待て。「え。「宿屋の亭主とかはどうしたのだ。「手足

を縛さるつて猿轡さるぐつわを嘴かまして、雑具部屋へ入れとききました。「よし、よし。仕事が済んだ

ら検しらべて見て大抵なら無事に帰してやれ。「へい左様なら。と八蔵は勝手に行きて銀平を

見れば、「八、やい、置去りにしてどこへ行つていた。というさえ今は巻舌にて、泥のご

とくに酔うたるを、飲直さむとて連出しぬ。

十八 虐殺

得三は他に一口の短刀を取り出して、腰に帯び、下枝を殺さんと心を決めて、北の台に赴き見れば、小手高う背に捻じて縛めて、柱に結え附け置きたるまま、下枝は膝に額を埋め、身動きもせでいたりけり。

「約束通り寝に来た。と肩に手を懸け引起し、移ろい果てたる花の色、悩める風情を打視め、『どうだ、切ないか。永い年月よく辛抱をした。豪い者だ。感心な女だ。その性根にすっかり惚れた。柔順に抱かれて寝る気は無いか。』と嘲弄されて切齒をなし、

「ええ汚らしい、聞とうござんせぬ。と頭を掉れば嘲笑い、『聞きとうのうても聞かさにや置かぬ、もう一度念のためだが、思い切つて応といわないか。』嫌否ですよ。」「そうか、淡々としたものだ。そんならこつちへ来な。好い者を見せてやる。立て、ええ立たないか。」「あれ。と下枝は引立られ、殺氣満ちたる得三の面色、こは殺さるるに極つたりと、屠所の羊のとぼとぼと、廊下伝いに歩は一步、死地に近寄る哀れさよ。蜉蝣の命、朝の露、そも果敢しといわば言え、身に比べなば何かあらむ。

閻王の使者に追立てられ、歩むに長き廻廊も死に行く身はいと近く、人形室に引入れ

られて亡き母の存いまそ生りし日を思い出し、下枝は涙さしぐみぬ。さはあれ業苦の浮世を遁のがれ、天堂に在おす御傍おんそばへ行くとと思えば殺さるる生命いのちはさらさら惜からじと、下枝は少しも悪わる怖びれず。その時得三下枝をば、高田の傍かたえに押据えつ、いと見苦しき死様を指さしていいけるは、「下枝見ろ、この顔色つらつきを。殺されるのはなかなか一通りの苦しみじゃないぜ、それもこう一思いに殺ればまだしもだが、いざお前を殺すという時には、これ迄の腹癰はらいせに、かねても言い聞かした通り、虐なぶり殺ころしにしてやるのだ。可いいか、それでも可いいか。これと、肩を押えてゆすぶれば、打戦うちわなくのみ答は無いし。「それからまだある。この男と、お前と、情しんじゅう死しをした様にして死恥さちを曝さらすのだ。どうだ。どうだ。下枝は恨めしげに眼を 得三様、貴下あなたは可愛いねえ。 とういえば可いい。それは出来ないだろう。やっぱり、斬られたり、突かれたりする方が希望のぞみなのか、さあ何と。と言いわることことにひやひやと身体からだに冷たき汗しつとり、斬刻きりきぎまるるよりつらからめ。猛獸いけにえ犠牲えを獲えて直ぐには殺さず暫時しばらくこれを弄もてあそびて、早慊あきたりけむ得三は、下枝をはたと蹴返せば、苦あつと仰のけ様さまに僵たおれつつ呼吸いきも絶たゆげに唸うめきいたり。「やい、婦人おんな、冥途めいどの土産に聞かしてやる。汝きさまの母親はな。顔も氣質だてきさまも汝きに肖おて、やっぱり我われの言うことを聞かなかつたから、毒を飲まして得三が殺したのだ。下枝は驚きに氣力を復して、打震えて力無き膝立直して起き返り、「怪ししき死し様遊

ばしたが、そんなら得三、おのれがかい。「おう、我だ。驚いたか。「ええ憎らしいその
 咽喉のどへ喰附くつきいてやりたいねえ。「へ、へ、唇へ喰附くつきいて、接吻キッスならば希望のぞみだが、咽喉へは
 真平御免蒙こうむる。どれ手を下ろして料理りようろうか。と立懸たちかられて、「あれえ、人殺し。と一
 生懸命もすそ、裳もすそを乱みだして遁にげ出でづれば、縛いましめの縄の端を踏止しりめられて後居しりに倒れ、「誰ぞ助けて、
 助けて。と泣声か噎ならして叫こび立たつれば、得三は打笑うちわらい、「よくある奴だ。殺して欲いの死
 にたいのと、口癖くちくせにいうていて、いざとなるとその通り。ても未練おんなな婦人おんなだな。「いえ、
 死にとうない、死にとうない。親を殺した敵かたきと知しつては、私わたしや殺されるのは口惜くちおしい。と
 伏ふしつ転まろびつ身をあせりぬ。

得三は床柱とこばしらを見て屈うちうなずなし、打うち領うき、やにわに下枝したえを抱いだき寄よせ、「跪もがくな。じつとして
 おれ。とかの人形と押並おしなべて、床柱へぐるぐる巻まきに下枝の手足を縛しり附つけ、一足退すつて
 突立つちたり。下枝は無念きささ遣したる方かたなく、身体からだを悶もえて泣なき悲かなしむを寛ゆる々と打見遣うちみり、
 「今となつては汝きさの方かたから随したがいます、財産も渡わたしますと吐ぬかしても許ゆるしはせぬ。と言いい放
 てば、下枝は顔こほに溢あふれかかる黒髪くろがみを颯さつと振分まなこけ、眼血なみだ走はしり、「得三様さん、どうしても殺すの
 か。という声こゑいとど、裏枯うしろれたり。「うむ、虐なぶり殺ころしにするのだ。「あれえ。「何だ、ま
 だびくびくするか、往生際いまいわの見苦しい奴だ。「そんならどうでも助たすからぬか、末期いまいわの際ときに

次三郎様にお目に懸つて、おのれの悪事をお知らせ申し敵が討つて貰いたい。と泣き入る涙も尽き果てて血をも絞らむばかりなり。「次三もな我が命つけて、八蔵が今朝毒殺したわい。「ええあの方まで殺したのか。御方の失せさせたまひし上は、最早この世に望みは無し、と下枝は落胆氣落ちして、「もう聞とうない、言とうない。さあお殺し。と口にて衣紋を引合わせ、縛られたるまま合掌して、從容として心中に観音の御名を念じける。

その時得三は袖を掲げて、雪より白き下枝の胸を、乳も蹴わに押寛ぐれば、動悸烈しく胸騒立ちて腹は浪打つごとくなり。全体虫が氣に喰わぬ腸断割つて出してやる。と刀引抜き逆手に取りぬ。

夜は正に三更万籟死して、天地は悪魔の独有たり。

（次三郎とは本間のこと、第一回より三回の間に出でて毒を飲みたる病人なり。鎌倉より東京のことなれば、敏き看官の眼も届くまじとて書添え置く。）

十九 二重の壁

得三 ひとたび 一度 うごか 手を動さば、万事ここに休せむかな。下枝の命の終らむには、この物語も休みぬべし。さらばそれに先立て、一旦滑川の旅店まで遁 のが れ出でたる下枝の、何とて再び家に帰りて屠 ほふ り殺さるる次第となりけむ、その顛 てんまつ 末を記し置くべし。

下枝は北の台に幽囚せられてより、春秋幾つか行きては帰れど、月も照さず花も訪 と い来ず、眼に見る物は恐ろしき鉄 くろがね の壁ばかりにて、日に新しゅうなるものは、苛 かしやく 責の品の替るのみ、苦痛いづくもあらざれど、家に伝わる財産も、我身の操も固く守護 まもり て、明しつ暮しつ長き年、月日は今日にいたるまで、待てども助くる人無ければ、最早忍び兼ねて宵のほど、壁に頭 かしら を打碎きて、自殺をせんとし詰め、西向の壁の中央 ただなか へ、ひと額を触れけるに、不思議や壁は縦五尺、横三尺ばかり、裂けたらむがごとく颯 さっ と開きて、身には微 う 傷 すで も負わざりけり。

大名の住めりし邸 やしき なれば、壁と見せて忍び戸 こしら を拵え置き、それより間道への抜穴など、旧き建物にはあることなり。人形の後の小座敷もこれと同じきものなるべし。

こは怪しやと思ひながら、開きたる壁の外を見るに、暗くてしかとは見分け難きが、壇 だ 階 いはしこ 子めきたるものあり。静に蹈 ふ みて下り行くに足はやがて地に附きつ、暗さはいよいよ増りぬれど、土平らにて歩むに易し。西へ西へと志して爪探りに進み行けば、蝙蝠 かわほり 顔に

飛び違い、清水の滴^{したたはだえとお}々膚を透して、物凄きこと言わむ方無し。とこうして道のほど、一町ばかり行きける時、遙^{はるか}に梟の目のごとき洞穴の出口見えぬ。

この洞穴は比企ヶ谷の森の中にあり。さして目立つほどのものにあらねば、誰も這^{はい}入つて見た者無し。

下枝は穴を這出でて始めて天日を拝したる、喜び譬^{たと}えんものも無く、死なんとしたる氣を替えて、誰か慈悲ある人に縋^{すが}りて、身の窮苦を歎き訴え、扶助^{たすけ}を乞わんと思いつる。それは夕暮のことにして、畦^{あぜ}道より北の方^{かた}、里ある方へぞ歩みたれ。

（得三が高^{たか}楼^{どの}にて女を見たるはこの時なり。）

かくて下枝は滑川の八橋楼の裏手より、泰助の座敷に入りたるが、浮世に馴^なれぬ女氣に人の邪正を謀^{はか}りかね、うかとは口^{くち}を利かれねば、黙して様子を見ているうち、別室に伴われ、一人残され寢床に臥して、越方行末思い侘^わび、涙に暮れていたりし折から、かの八蔵に見とがめられぬ。そのみならず妹お藤を、今宵高田^{めあわ}に娶^{めあわ}すよしかねて得三に聞いたれば、こもまた心懸りなり、一度家に立返りて何卒^{なにとぞ}お藤を救いだし、またこそ忍び出でなんと、忌^{いま}しき古巢に帰るとき、多くの人に怪^{あやし}ませて、赤城家に目を附けさせなば、何か^{たより}に便^{たより}よかるべしと小指一節喰い切つて、かの血の痕^{あと}を赤城家の裏口まで印し置きて、再び

件の穴に入り冥途よみじを歩みて壇階子に足踏懸くれば月明し。いずくよりか洩もると見れば、壁を二重に造りなして、外の壁と内の壁の間にかかる踏壇を、仕懸けて穴へ導くにて透間より月の照射さすなり。直ぐ眼の下は裏庭にてこの時深き叢くさむらたずに在ある人ありければ、（これ泰助なり）浴衣の裳すそを引裂きて、小指の血にて文字したため、かかる用にもたたむかとして道にて拾こいしいし礫ちように包み、丁と投ぐればあたかも可よし。その人の目に触れて、手に開かれしを見て嬉しく、さてお藤をばいかにせむ。

この壇階子の中央なかほどより道は両ふたつに岐わかれたり。右に行けば北の台なるかの座敷牢に出づべきを、下枝は左の方かたに行きぬ。見も知らざる廊下細くしていと長し。肩をすぼめてようように歩み行くに、両側はまた壁なり。理外の理さえありと聞くこは家の外ほかの家ならんか。十数年来住める身の、得三もこは知らざるなり。廊下の終る処に開戸あり、開けて入れば自おのずから音なく閉じて彼方かなたより顧みれば壁と見紛うばかりなり。ここぞかの人形の室の裏なる密室になんありける。

この時しも得三等らが、お藤を責めて婚姻を迫る折なりしかば、いかにせば救い得られんかと、思い悩みいたるうち、火取虫に洋燈ランブ消えて、こよなき機会を得たるにぞ、怪しき声音に驚かせしに、折よく外にも人ありて妹を抱いだきて遁出にげいでたれば、嬉しやお藤は助かりぬ。

我も早く出去らんとまたもや廊下を伝わりて穴に下りんと蹈迷い、運拙うしてまた旧の座敷牢に入り終んぬ。かかりしほどに身は疲れ、小指の疵の痛苦劇しく、心ばかりは急れども、足蹠踉いて腰起たず、気さえ漸次に遠くなりつ、前後も知らでいたりけるを、得三に見出されて、さてこそかくは悪魔の手に斬殺されんとするものなれ。

二十 赤城様——得三様

普門品、大悲の誓願を祈念して、下枝は氣息奄々と、無何有の里に入りつつも、刀尋段々壊と唱うる時、得三は白刃を取直し、電光胸前に閃き来りぬ。この景この時、室外に声あり。

「アカギサン、トクゾウサン。」

不意に驚き得三は今や下枝を突かんとしたる刀を控えて、耳傾くれば、「あかアぎさん、とくぞうさん。」

得三は我耳を疑うごとく、耳朶に手をあてて眉を顰めつ、傾聴すれば、たしかに人声、
「赤城様——得三様。」

得三はぎよつとして、四辺あたを見廻し、人形の被かを取つて、下枝にすつぽりと打被うちかぶせ、己おのが所業おおを蔽おほい隠して、白刃たもとに袂たもとを打着せながら洋燈ランプの心を暗うする、さそくの氣転かへこれどなたで可しと、「誰だ。何誰どなたじゃ。と呼懸よこくれば、答は無く、」赤城様。得三様。しや忌々し何奴ぞと得三からりと部屋へやの戸開ひらくれば、かの声少し遠とほざかりて、また、「赤城様、得三様。「ええ、誰だ。誰だ。とつかつかと外おもてに出れば、廊下おほをばたばたと走る音おとして姿は見えずに、「赤得、赤得。背後うしろの方かたにてまた別人べにんの声、「赤城様、得三様。啊呀あなやと背後うしろを見返れば以前の声こゝろが、「赤得、赤得。と笑うがごとく泣くがごとく恨むがごとく嘲あざわらけるごとく、様々さまざまの調子てうしを変かじて遠くよりまた近くより、透間とけもあらせず呼立よてられ、得三は赤くなり、蒼あおくなり、行きつ戻りつ、うろ、うろ、うろ。拍子うたに懸かけて、「赤、赤、赤、赤。「何者だ。何奴だ。出合であえ出合あえ。といいながら、得三は血眼ちまなこにて人形室にんぎようむへ駈かけ戻り、と見れば下枝は被かを被かせ置きたるまま寂さびとして声をも立てず。「ちええ、面倒だ。と劍けんを揮ふるい、胸むな前さき目懸めけて突つ込みしが、心急せきたる手元てもと狂くるいて、肩先かたぐざと突通つとせば、きやツと魂消たまぎる下枝したの聲。

途端とたんに烈はげしく戸かどを打叩たたきて、「赤得、赤得。と叫こゝろび立たつれば、「汝野狐奴うぬめ、また来うせた。と得三室外とくさんぐわいへ躍出うづれば、ぱつと遁出にげだす人影にんげいあり。廊下らうかの暗闇やみに姿を隠してまた——得三

をぞ呼んだりける。

憎さも憎しと得三が、地蹈じだんだ ふんで縦横に刃を打掉る滅多打。声はようよう遙はるかになり、北の台にて哀かなげに、「あかアぎさん、とくぞうさん。——四辺あたりは寂然しん。

これより以前得三が人形室を走り出でて声する者を追いける時、室の外より得三と入いり違がいに、鳥のごとくに飛び込む者あり。突然下枝の被を外してこれを人形に被らせつ。

その身は日蔽ひおおいの影に潜みぬ。

されば得三が引返し来て、被の上より突込みたるは、下枝にあらで人形なりけり。ただ下枝は右にありて床柱に縛し上げられつ、人形は左にありて床の間に据えられたる、肩は擦合うばかりなれば、白刃はくじんものを刺したるとき、下枝は胆消え目も眩くらみて、絶叫せしはさもありなん。またもや声に呼び出されて、得三再び室の外へ駈かけ行きたる時、幕に潜めるかの男は馳いたのごとく走り出で、手早く下枝の縄を解き、抱いだき下して耳に口、「心配すなと囁ささきたり。時しも廊下を蹈鳴ふみならして、得三の帰る様子に、かの男少し慌てる色ありしが、人形を傍わきへずらして柱に寄せ、被は取れて顔も形もあからさまなる、下枝を人形の跡へ突立せ、「声を立てるな。と小声に教えて、己おのれは大音に、「赤城様、得三様。」いかと思えば姿は亡なし。すでに幕の後うしろへ飛込みたるその早さ消ゆるに似たり。

かれもこれも一瞬時、得三は眼血走り、髪逆立ちて駈込つ、猶予う色無く柱に凭れる被
 を被りし人形に、斬つけ突つけ、狂氣のごとく、愉快、愉快。と叫びける。同時に戸口へ
 顔を差出し、「赤城様、得三様。「やあ、汝は！と得三が、物狂わしく顧みれば、「光
 来、光来。ここまで光来と、小手にて招くに、得三は腰に付けたる短銃を発射間も焦躁
 しく、手に取つて投附くれば、ひらりとはずして遁出すを、遣らじものを。とこの度は洋
 燈を片手に追懸けて、氣も上の空何やらむ足に躓き怪し飛びて、火影に見ればこはいかに、
 お藤を連れて身を隠せしと、思い詰めたる老婆お録、手足を八重十文字に縛られつ、猿
 轡さえ囁まされて、芋のごとくに転がりたり。

得三後居にどうと坐し、「やい、この態はどうしたのだ。と口なる手拭退けてやれば、
 お録はごほんと咳き入りて、「はい、難有うございます。「ええどうしたのだ。「はい、
 はい。もしお聞きなされまし。あの時お藤様を人形の後へ隠して、それから貴下、階下へ
 おりてがらくた部屋の前を通ると、内でがさがさいたしますから、鼠か知らん、と覗きま
 すとね、どうでございましょう。あの探偵泰助奴がむくむくと起き上る処でございました。
 「えー！」

二十一 旭

幾度か水火の中に入出して、場数巧者の探偵吏、三日月と名に負う倉瀬泰助なれば、何とて脆くも得三の短銃に僵るべき。されば高樓より狙い撃たれ、外よりは悪僕二人が打揃いて入り来しは、さすがの泰助も今迄に余り経験無き危急の場合、一度は狼狽したりしが、かねて携うる絵具にて、手早く血汐を装いて、第三発の放たれしを、避けつつわざと撃たれし体にて叢に僵れしに、果せるかな悪人輩は誑死に欺かれぬ。

さりながら八蔵がなお念のため鉄棒にて撲り潰さむと犇くにぞ、その時敵は二人なれば、蹴散らして一度退かむか、さしては再び忍び入るにはなはだ便り悪ければ、太く心を痛めしが、あたかも好し得右衛門がこの折門を叩きしかば、難無く銀平に抱かれて、雑具部屋へ押込まれつ、後より得右衛門が擒にされて、同じ室へ入れられたるをも、泰助はよく知れるなり。

四辺静になりしかば、潜かに頭を擡ぐる処を、老婆お録に見咎められぬ。声立てさせじと飛菟りて、お録の咽喉を絞め上げ絞め上げ、老婆が呼吸も絶々に手を合して拝むを見澄まし、さらば生命を許さむあいだ、お藤を閉込め置く処へ、案内せよ、と前に立たせ、

例の人形室に赴きて、その仕懸の巧みなるに舌を巻きて驚歎せり。かくてかの密室より、お藤を助け出しつつ、かたのごとく老婆を縛りてまた雑具部屋へ引取りしを、知る者絶えて無りけり。それより泰助は庭の空井戸の中にお藤を忍ばせ、再び雑具部屋へ引返して旧のごとく死を粧い、身動きもせでいたりしかば、二三度八蔵が見廻りしも全く死したる者と信じて、かくとは思ひ懸けざりき。

とこうするうち、高田は殺され悪僕二人は酒を飲みに出行きたれば、時分は好しと泰助は忍びやかに身支度するうち、二階には下枝の悲鳴頻なり。驚破やと起って行き見れば、この時しも得三が犠牲を手玉に取りて、活み殺しみなぶりおれる処なりし。

ここにおいて泰助も、と胸を吐きて途方に暮れぬ。他の事ならず。得三は刀を手にし、短銃を腰にしたり。我泰助は寸鉄も帶びず。相對して戦わば利無きこと必定なり。とあつて捕吏を招集せんか、下枝は風前の燈の、非道の刃にゆらぐ魂の緒、絶えんは半時を越すべからず。よしや下枝を救い得ずとも殺人犯の罪人を、見事我手に捕縛せば、我探偵たる義務は完し。されども本間が死期の依頼を天に誓いし一諾あり、人情としては決して下枝を死なすべからず。さりとて出て闘わんか、我が身命は立処に滅し、この大悪人の罪状を公になし難し。噫公道人情 両 是 非。人情公道 最 難 為。若依公道

人情欠。にんじょうかけ 順了人情公道虧。にんじょうにしがわばこうどうをかく 如かず人情を棄てて公道に就き、眼前に下枝が虐殺さるる深苦の様を傍觀せんか、と一度は思い決めつ、我同僚の探偵吏に寸鉄を帯びずしてよく大功を奏するを、榮として誇りしが、今より後は我を折りて、身に護身銃を帶すべしと、男泣に泣きしとなん。

下枝が死を宣告され、仇敵あだがたきの手には死なじとて、歎き悶ゆる風情を見て、咄嗟とつさに一奇計を得たり。

走りて三たび雑具部屋に帰り、得右衛門の耳に囁きて、その計略を告げ、一臂いつびの力を添えられんことを求めしかば、件の滑稽翁兼かたり好事家、手足を舞わして奇絶妙と称し、両り膚ようはだ脱ぎて向う鉢巻、用意は好きぞやらかせと、齊ひとしく人形室の前に至れば、美婦人正に刑柱にあり、白刃乳ちの下に臨める刹那せつな、幸にして天地は惡魔の所有もに非ず。

得右衛門は得三の名を呼びて室外におびき出し、泰助は難無く室内に入りて潜むを得たり。しかる後二人計略合期ごうきして泰助をして奇功を奏せしめたる、この処得右衛門大出来というべし。被かを被替かえて虚兵を張り、人形を身代みがわりにして下枝を隠し、二度毒刃ふたたびどくじんを外して三度目に、得三が親仁おやじを追懸け出でて、老婆に出逢い、一条の物語に少しく隙ひまの取れるにぞ、いでこの時と泰助は、下枝を抱いだきて易々と庭口に立出づれば、得右衛門待受け

て、彼はお藤を背に荷にない、これは下枝を肩に懸けて、滑川にぞ引揚げける。

時正に東天紅。

暗号一発捕吏を整え、倉瀬泰助疾駆しつして雪の下に到り見れば、老婆録は得三が乱心の手ほふに屠られて、血に染みて死しいたり。更に進んで二階に上れば、得三は自殺して、人形の前に伏しいたり。

旭の光輝ひかりに照らされたる、人形の瞳は玲瓏れいろうと人を射て、右眼、得三の死体を見て瞑めいするがごとく、左眼泰助を迎えて謝するがとし。五体の玉は乱刃らんじんに碎けず左の肩わずかに微傷こんの痕あり。

明治二十六（一八九三）年五月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成1」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年8月22日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第一巻」岩波書店

1942（昭和17）年7月30日第1刷発行

初出：「探偵小説第十一集 活人形」春陽堂

1893（明治26）年5月3日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：清角克由

2014年1月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

活人形

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>